

大正八年十一月二十七日發行(毎月一回廿日發行)大正八年十月廿四日第三種郵便物認可

十一月一號

絶對の善惡——眞善知識と絶對開信

一實の大道

選擇本願の行信——「正信偽講話」

辻富路子嬢追悼法話

信仰書簡一章

▼御正忌 ▼御往生

# 求道

第拾五卷

第參號

講話

絶對の善惡——「眞善知識と絶對聞信」……………(一)

一 實の大道……………近角 常觀……………(六)

一 他力に對する世間の誤解……………(一)

二 自力聖道は假門なり……………(二)

三 私の話は兩面に出る……………(三)

四 『文類正信偽』……………(四)

五 同行信者の思つて居る……………(五)

六 「らくなといふ」ことが……………(六)

一 眞實の行信、方便の行信……………(一)

二 淨土宗といふ念佛の意義……………(二)

三 十九、二十願の意義……………(三)

四 法然上人より親鸞聖人……………(四)

五 聖覺法印……………(五)

六 『唯信鈔』文……………(六)

七 淨土眞實の行……………(七)

八 淨國建立の起源……………(八)

九 選擇本願念佛……………(九)

一〇 眞實行の願、第十七願……………(一〇)

一一 行信關係……………(一一)

一二 報佛報土等……………(一二)

一三 正信念佛偈を作つて曰く……………(一三)

一四 眞實行の願、第十七願……………(一四)

一五 報佛報土等……………(一五)

一六 正信念佛偈を作つて曰く……………(一六)

一七 特に悲憫せしむ……………(一七)

一八 眞實行の願、第十七願……………(一八)

一九 報佛報土等……………(一九)

二〇 正信念佛偈を作つて曰く……………(二〇)

二一 眞實行の願、第十七願……………(二一)

二二 報佛報土等……………(二二)

二三 正信念佛偈を作つて曰く……………(二三)

二四 眞實行の願、第十七願……………(二四)

二五 報佛報土等……………(二五)

二六 正信念佛偈を作つて曰く……………(二六)

二七 眞實行の願、第十七願……………(二七)

二八 報佛報土等……………(二八)

二九 正信念佛偈を作つて曰く……………(二九)

三〇 眞實行の願、第十七願……………(三〇)

●●● 每日曜午前九時  
●●● 毎土曜午後七時  
●●● 毎月十五日午前九時慶信會  
●●● 毎月二十八日午後七時總聖會

求道會館  
(本郷區森川町一番地)

●●● 毎土曜午後二時

第一求道會  
(九段坂佛數俱樂部)

●●● 毎月二十七日午後七時

第三求道會  
(日本橋區登町説教所)

●●● 每日曜午前八時

日曜學校  
(求道會館)

絶對の善惡

(眞善知識と絶對聞信)

○極惡最下の衆生の爲に、極善最上の法を説くといふは、絶對の善惡である。たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとのよき人の仰は、即絶對の善である。何れの行も及びがなき身なれば、地獄は必定すみかぞかしといふは、絶對の惡である。弘經大士宗師等の拯濟したまふは絶對の善である。無邊極濁惡は絶對の惡である。此絶對の善惡は相對的にあらずして、其極惡最下を飽まで救濟したまふが、絶對不二の極善最上の誓願一佛乘、即第一義乘である。

を我が善根として執して主張するもの、亦反對に惡を往生の業なりと執し、念佛を以て邊地の往生なりとして、遂には地獄に落つると貶するもの、互に相争ふのである。聖人が常に否定したまふ善惡は、是れ相對的の是非善惡である。『是非しらず、邪正もわかぬこの身なり』と仰せられるも、『善惡のふたつ總してもて存知せざるなり』と仰せらるゝも、何れも相對的の善惡を否定ましますのである。

○『そのゆへは如來の御心によしとおほしめすほどに知り通したらばこそ、よきを知りたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどに知り通したらばこそ、あしきを知りたるにてもあらめ』といふは、畢竟相對的の善惡は、如來のしらしめす絶對のものにあらず

ることを喝破せられたのである。

○『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに』といふは、即絶對の惡を示されたのである。其絶對の惡たる虚假不實を、飽まで見捨てたまはぬ眞實を、『たゞ念佛のみぞまことにておはします』と仰せられたのである。畢竟是が『たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せ』である。此絶對の眞實が地獄必定の絶對惡に徹底したる有様が、『たとひ法然上人にすかさされまゐらせて地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』といふ絶對信である。

○併絶對墮獄の惡人に對して、如何にしてよき人の仰が蒙らされるかを知らねばならぬ。全體よき人といふは善知識のことである。猶一層剴切に言へば、眞の善知識である。愚禿鈔に善知識につきて下の如く示されてある。

言三無人空過澤一者

の傾向は、たしかに服從的に解して居るのである。念佛すべしとあるゆへに、念佛せねばならぬといふ領解はたしかに服從である。今聖人がよき人の仰を蒙りて信ぜられたのは、服從ではない、信順である。

○此聖人の絶對信の味は、執持鈔を通して他の一面を明らかにすることを得る。曰く

故聖人(黒谷源空聖人の御ことなり)のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるへしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまいるへしとおもふなり。

併此文字と雖、絶對信の味を實驗せざるものには、矢張り服從的に見ることが出来る。即源空の行くところへ行くとおもへといふことは、意味のとりやうによりては随分冒險なことである。全體何處へ連れてゆかれるか分からぬところを、一緒に行かんと思ひかためるのは、随分決心した覺悟と言はねばなるまい。服從も極

惡友也、不值眞善知識也、眞言對假、對僞、善知識者對惡知識也

眞善知識 正善知識

實善知識 是善知識

善善知識 善性人也

惡知識者 假善知識

僞善知識 邪善知識

虛善知識 非善知識

惡善知識 惡性人也

和讃に、眞の知識にあふことは、かたきかなかになほかたしと、法然上人に遇ひたてまつりしことを感謝されども、畢竟よきひとの仰を蒙りて、信するほかに別の仔細なきなりとの同一告白である。

○然らば眞の知識とまで特に感激された味をいたゞかねばならぬ。單に唯念佛すべしと律法的に説かれたを、服從的に信するのであると考へてはならぬ。近時動もすれば念佛すべしと口稱を律法的に募らんとする一部

端なる盲目的服從と言はねばならぬ。

○かくの如く領解しては、眞の善知識の味は分らぬ。

次の文にも『このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし』とも、歎異鈔にも『いつれの行もおよびかたき身なれば、地獄は必定すみかぞかし』ともある。たとへば洪水氾濫して沈淪せんとするとき、舟を艤して呼ぶて曰く、此舟に乗るべし、我汝と運命を共にせん、舟若し覆らば我も亦沈淪せん、我存せんかぎり我汝と共に生存せん、我舟に乗りて我掉すに任すべしと。この時唯信賴するの外なかるべし。又病危き時人あり藥を與へて曰く、我此の如く嘗め試みたり、生死汝と運命を共にせんと。病人之を聽かば信するほかに別の仔細なかるべし。是源空があらんところへゆかんとおもはるへしとの仰なり。畢竟するに法然上人自ら身を以て導きたまふなり。かくてこそ眞の知識と仰せらるゝ所以である。畢竟汝一心正念にして、直に來れ。我能く汝を護らんとこの如來の

御心のまゝを、御身を以て導きて下さるのである。地獄必定の我等を、何處までも見捨てたまはぬ大慈大悲を、御身の上に體現して、我等と運命を同じふして下さるのである。我等は此に於て信順信服せねばならぬことになる。

○かくの如き大慈大悲の絶對大善を感じるものゆへに『たとひ法然上人にすかされまゐらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』といふ絶對信を生するやうになる。故に執持鈔には『善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにあつへし、さればたゞ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまゐらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなり』とある。

○若し法然上人の仰そのものに、此大慈大悲の體現あることを感得せずんば、法然上人の人格を冒險的に信したることになりて、法然上人と彌陀の本願と離るゝ

さずして、佛日曙光の前には、同一光明に照さるゝのである。

○此に於てや念佛諸善、即絶對善と相對善の二機對論のときは、信疑對、賢愚對、善惡對、正邪對、是非對、實虛對、眞僞對等の比較を生し來ることになる。是れ畢竟絶對善が徹底し來りたる絶對信の有様である。佛願の生起本末を聞信して、疑心あることなき信心歡喜である。如來の眞心徹到せる金剛の信である。

○併此の如き金剛の信心を開闡したるは、眞の知識の導きによりて、絶對の救済を與へられたることなれば、我等自身は、ます／＼無邊極濁惡たることを懺悔慚愧せねばならぬ。是愚禿鈔に

聞賢者信 顯愚禿心

賢者信 内賢外愚也

愚禿心 内愚外賢也

と告白したまひ、又述懐讚に

淨土眞宗に歸すれども

ことになる。しかるに法然上人が其説きたまふ選擇本願を實驗體得して導きたまふのが、實に眞の善知識と仰かるゝ點である。聖人が唯圓房に對して『親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房同じ心にてありけり』と仰せられたのは、たしかに『佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ』しを、聖人が體現せられたのと全く同一である。

○此の如き大慈大悲に遇ひたてまつりて見れば、善も惡もあるものではない。實に何れの行も及びがたき身なれば、地獄は必定すみかである。定散二善の善機も、菩薩緣覺聲聞の傍機も、善性の人も、傲慢自力の心を翻して、他力の大悲に廻入すべく、泥んや人天の正機、逆惡の惡機、惡性の人々は、其何れの行も及びがたき煩惱具足の凡夫を憐みたまふ大悲に直入すべきである。是正信偈に『一切善惡凡夫人、聞信如來弘誓願』とも、『於哀定散與逆惡』とも、『憐愍善惡凡夫人』とも仰せらるゝ所以である。即相對の善惡は、夜中燈火の明滅に過

眞實のころはありがたし

虛假不實のわかみにて

清淨の心もさらになし、云云

と仰せられた點である。而して愚禿鈔の終に内外對に於て

内惡性外善性 内邪外正

内虛外實 内非外是

内僞外眞 内愚外賢

内假外眞

とあるは、『地獄は必定すみかぞかし』との罪惡觀を披瀝したまへるものにして、絶對罪惡の痛酷なる機の深信である。此の如き聖人の絶對信に對して、『善信善信眞善薩』と宣ふ聖德太子の告命を仰信すべきである。

# 一 實の大道

近角常觀

六

## 一 他力に對する世間の誤解

聖人の『和讃』に

萬行諸善の小路より 本願一實の大道に、

歸入しぬれば涅槃の、さとりはすなはちひらくなり。

今茲に話さんとする趣意は、我々この人生に在りて、

眞に救はる可き道は、

この本願一實の大道あるのみである。外に有ること無しとの意味である。

猶ほ少しく際立て、申述るに、今日世間に普通に行はれて居る思想に於ても、佛教には

自力、他力の二門がある。自力の自ら悟るもあれば、他力の唯信仰でゆく道もある。けれども中で他力は行

き易く、自力は斯くくと、二道あるやうに考へるが今日世間普通の考へ方である。而已ならず佛教自身に於ても、先づ初に

難行道、易行道と、六つかしいのと易いのがあるといふやうに、二つ並べて書いてある。而も何れが重くなりてあるかといふに、これは文字上より來るなるも、晝夜精進の心ある者は難行道を行くが普通である。けれども懦弱怯劣の輩は茲に易行道があるから之を行けと

文章上にも然ら現はれてある。寧ろ大に修行して行く可きが當然にて、併しそれが

出來ぬ者の爲には茲に變則の道があると、書いてある

かと迄に疑ふ程にある。故に易行の他力は弱き者の爲

に存することとなり、二つある上にも難行道の方が順

當にして、易行は特別の場合の爲に設けられたる變則

の道であるかに見える。又世間の上からいふも斯の如

きかに考へられ、『人間は努力が肝腎である』——この

努力を自力とのみ理解してはいかぬ處もあるも——

『自らのことは自から働いて、自から仕末する。』人の

力を借るは感服せぬこととなつてある。故に

他力は氣の弱さ、卑屈なる、人の力を當てにした教へのやうに人が聞きて、これは

今日の社會に他力が徹せぬ處あるも、一つはこれがあ

るからである。故に普通としては、自力が先づ當り前

である、これは何人の胸にも之があらんと思ふのである。

## 二 自力聖道は假門なり

然るに他力の意義が著しく顯はれて來て、親鸞聖人になれば、次の語さへあるのである。

聖道權化の方便に、衆生ひさしくとどまりて、

諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。

迂婉なる私の言葉で言ふよりも、親鸞聖人の言葉で言

ふ。聖道の自力難行の道は、權假方便の道にして、これ

眞の道にあらず、假の道である。我々自己の力を持み

として自力で行くとすれば、斯く

假りにそれて連れ込まれる、丈けて、これ眞實の大道で

無いと、二道並べて書いて無いくらゐることに非ず、

難行自力の道は、これ權假方便の道にして、それでは

眞に到れること無く、又

足地を踏む人間が、自らの力にて佛になり、聖者に到

るなど、あり得ぬことであると。爾るに衆生久しくそ

れに止まりて、『諸有に流轉の身とぞなる。』——今日我

七

願の一乗があるわけであるから、  
總てが之に歸して、この道に救はれよと。これが聖人が『本願一實の大道』とか、『本願圓頓一乘』とか、斯くこの外に道なるものゝ存在が無いと、思ひ切つて斷言せられた處である。而もそれをさういふ一種の法門沙汰で言ふのでは無意味であるから、それを我々の内面的實驗、信仰上の經驗として、『如何にもその大道があるばかりであつた、如何にも偉大なる大道に出して貰つた』と、そこになる味ひを語らんとするのが話の趣意である。

### 三 私の話は両面に出る

處で私の話は常に二岐に錯綜する。それは私のを讀み、聞き仕て下さる方の向きに二類があるからである。設へば右より來られると、左より來られると、立場を異にして來られるの故、それに知らずには一方には『そんなに行きてはいかぬ、此方だ』と言はねばならぬし、一方には『此方では無い、そちらだ』と言はなく

てはならぬ。それが右か左か分り難いやうになるのであるも、これは必要上己むを得ぬ。今この『本願一實の大道』の話にしても、現代の人には、『それは著しきことである、人間は自ら努めて到らねばならぬが原則であるに、他力が絶對の大道とは、そは耳寄り』と思はれやうし、又今迄他力を聞き慣れて居られる方の中には『なに、そんなことを事珍らしく』と思はれる方もあらうといふものである。その代はり青年諸君の中などには、『人間は自から働いて行く可きに、他の力てなど、怪しからぬ』と思はれる方もあるかも知れぬ。斯く聞いて下さる方に二類がある故、私の話も何うしても兩面に出る。併しそれは注意すれば聞き分けは出来るの故、何ぞ今迄聞きつけの人は、私の言ふのを然り／＼と賛成する方のみ聞かず、私の言には皆様の思ふて居らるゝ眞宗とは、ちと違ふ處あるに氣をつけられ度いし、又青年諸君が各自の思ひを尊重せらるゝも結構であるも、

その思ひが思ふ如くにゆかぬと申す方に氣を付けて貰ひ度いものである。

### 四 『文類正信偈』

そこで少しく話が専門に涉るも、平日御同やうが拜誦して居る處の『正信偈』である。知らるゝ如く親鸞聖人が『教行信證』を作られた時に、『行卷』の終に書かれた處の偈文である。『偈は己心をのぶる』とありて、日本の歌、西洋の詩と同やうに、『偈』は自身の情をのべられたものである。數ある偈文、何れも重要ならぬは無けれども、殊に聖人の『正信念佛偈』はわけて大切なことになりて居る。處てそれは聖人五十二歳の時に書かれたものであるが、猶一つ晩年七十三歳の時に書かれた『正信偈』がある。それは七十三歳の時聖人『略文類』を作られて、——つまり『教行信證』を略し、約めたものである。長い『教行信證』が、それには僅か十七枚程になりて居りて、

勿論雙方とも文類には違はぬも、特にこの方は『淨土文類聚鈔』といふことになりて居る。即ちこの中に在る『正信偈』だから、この方は『文類正信偈』と呼ぶことになりてある。つまり五十二歳と七十二歳と、製作の年時に約廿年の差があるわけである。處がこの『正信偈』が、五十二の時のも七十の時の御作も、殆ど違はぬ。又違つてはならぬも殆ど同じで、故に儀式ごとの時之を讀むを聞かれても、普通の『正信偈』と變らぬと思はれる程である。若し之が世間の意見であれば、年毎に違つて來る。聖人の信仰故何年たつても違はぬ。併し違はぬと言つても、處々違つてある。それは我々でも曾つて雑誌の原稿を盗まれたことあつて、その時、同じことを書き直してみても、もと通りには書け無い、多少は違つて來る。その違つたる點を見ると、五十二歳作の『正信偈』の方には、龍樹菩薩の處が大乗無上の法を宣説し、歡喜地を證して安樂に生ぜ

ん。難行の陸路苦しきことを顯示して、易行の水道  
楽しきことを信樂せしむ。

とあるのが、『文類正信偈』の方には少し變つて居て、  
そ、こが意味深い。

大乘無上の法を宣説し、歡喜地を證して安樂に生ぜ  
ん。十住毘婆娑論を造りて、難行の峻路を特に悲憐  
せしめ、易行の大道を廣く開示す。

となりてある。こは窮極同じ意味であるも『文類正信  
偈』の方、言葉の言ひ廻はしの上に、頗る意味あると  
思ふから、それをば申して見やうと思ふのである。

### 五 同行信者の思うて居る他力

それは茲少しく露骨に、茲に難易の兩道がある、自  
力他力の二門がある。今その何れに行かう。乃至座禪  
でやらうか、他力でやらうか、何ちらを取らう。然うし  
た場合の時に、その

どちらでもと考を得ること、誰も思うて居るのであ  
る。こは信者の人でもそうあるらしい。自力と他力と

あるが、自力に行くと御開山様に叱られると、寧ろ一  
方には行き度くも行けぬとやうの心持であるらしい。  
そんな此方の店、彼處の店と買物するやうの信心では、  
信仰の意味が徹しやうは無い。然るに他力易行といふ  
ことが、言葉からがさういふ氣易い意味に思はれて居  
るから、一方からは常識より考へて、『人間は善くせぬ  
ば。悪くしてはいかぬ。働かなくては喰へぬぞ』と。そ  
れは人間の善し惡しからだ、  
然う考へるのが當然である。働かぬ者が働かずに喰ふ  
安心を仕やうと言うたとて、それは出來ぬが當り前て  
ある。金が無い者が友人の所に行きて、『金が無くて困  
る』然う言うたら友人が遣らう出して呉れるであらう。  
そんなこと言うたとて知るものかと、言はれて仕まふ  
は決つて居るのである。

### 六 『らくなといふことがあるものか』

此の頃も、兩三年前の求道會の時に、美濃から來聽せ  
られた或の方があつた。先き頃私が歸郷の時に、母を

連れて近江に行き度いとであつたから、寧ろ東京に來  
られるやうに言うてやつて置いた。近頃連れて見えて  
話して居ることである。

七十になる年寄が青年と一緒に信仰問題に苦心する。

併し彌々といふ所になると、『それはらくぢやな、』と言  
ふ。私『らくなといふことが有るものか』と叱る。自分

が借金に困つて居る處に、思ひがけ無く親切な人が引  
受けて呉れた。その時『それはらくぢやな』と、そんな  
挨拶が出るは、

彼の人<sup>は</sup>屹<sup>度</sup>然<sup>ら</sup>ういふに決つて居るとの腹があるから  
出る言である。それは他力易行といふことを、當然親

は助けて呉れるに決つて居ると考へたら、それはらく  
とも言へやう。『善く出來無くともよい』はらくなとい  
ふことになるのだから。併しそれは慈悲の徹した言で

無いと、老人攫えて意地目<sup>いぢめ</sup>で居ることである。老人も  
大低て無い。此間ももう歸ると言ひ出したを、止めて  
話して居る。先達ても私朝起きると、

老人私の家の周圍を、ぐる／＼廻はつて居る。『何うし  
たのか』『前晚安心され無つたから』と、老人もど眞劍  
である。そんなのを引き受けて話して居る私もど眞劍  
である。こはこれ程迄にもして聞く人があると、手引  
と思つて申したのである。

そこで前に戻りて、難行、易行の言葉は暫く措く。  
常識より考へて、我々は何處迄も自ら努め、善は爲し、  
惡は責め、借りたは返し、働かねば喰へぬ。これは當  
り前故常識よりとしては、何うしても此の方が順序と  
なる。故に佛教に於ても煩惱は何處迄も斷じて、自ら  
清らかになる。この聖道自力を外にして、道の有りや  
うは無つたのであつた。處がそれがすら／＼と通れる  
程ならば、  
易行、他力は問題となる可きでは無つたのである。爾  
にその當然の道を辿らんとすれば、即ち難行陸路の困  
難が現はれて來る。そこで今の問題が起つて來ると、  
斯ういふことになるのである。

## 七 頂いてると思うて居つた私が

茲で勢ひ人生問題に移らなくてはならぬ。何故ならば座禪、戒行の六つかしきを言つたとして、今日の人に問題ならぬから、之を人生問題に卸して言ふ必要がある。それは何處へ卸して言ふ可きか、矢張り私の経験で言ふが一番よい。何故なら今迄の佛教に育つた人の弊を言ふにも、言ふ私がそれであつたのだから。嘗つても本願一實の大道の外、道無いと言つて居つた私が、然う言つて居て心には、『この佛教聞いて清らかな生活するのである、爲法不爲身の生活するのである、この法の爲に働くのである』と、この根性を持つて居た。故にそつといふ思ひで眞地目にやつて行く、それが宗教生活と取つて居たなら、それが先きより言ふ常識だつたのである。それで居て自分では信仰頂いた積りて居つたも、今から思ふと有難い方は輕かつた。矢張り『然う頂くと謹まなければ

ならぬ。然う思ふと、この慈悲の爲には身を粉にしても、あゝ斯う』と、その思ひの方が勝つて居た。故に信者の人が『この慈悲頂いた上はあゝ斯う』と、それは嗜む思ひから故氣儘に仕て居るよりはよい。併し私は段々それで行つて、『宗教の爲め、人の爲めには身を捨てても惜しまぬ。學問するのも宗教の爲め、イヤその學問も宗教の爲には捨て、やる』と、それを報恩業だと心得て、何處迄も身を犠牲にしてやる積りてやつて居つたのであつた。處が私が何程遣るも人がその如くせぬ。それだけの効果が覚えて來ぬ。すると何だか自分一人が損を仕て居ると思はれて來て、人は勝手な者である。之れでは自分一人が踏みつけられ、埋め草にされ、自分の思惑が立たぬとなつて來た。すると不平たらふ、自分はこれ程正しく仕て居るに、人が可かぬと、これが私の胸一杯になつて來たのである。

## 八 自己主張は人間の本质

そこで之を皆様は何處へ聞いて下されてもよい。或は家庭問題で、老人がこれ程遠慮仕て居るに、若い者が餘りに勝手だといふのも有らう。又若い人が親がくといふて居るも有らう。或は國際問題で獨逸が世界を統一する使命があると信じてかゝつたのが、あの通りの結果に終つたもそれであるし、又そのあと仕末を一身に引受けて、正義を標榜して立つたウイルソンが、神經衰弱に罹らねばならなくなつたもそれである。それはその筈、どの道人間の集りの世界なのだから。故に第一私の氣の附いたことは、『今迄自分は正しい』と、思つて居つた自分が、彌々となるとこれ丈けの者か。これは今迄俺がくと思つて居つたのが悪かつた』と、こゝが眼目の點なのである。青年の方は或は現今勞働問題、社會問題が起きて居る時に、そんな話は無交渉と思はれるかも知れぬも、實はこれ程直接影響のある話は無。こは私の思ひなるも、私の今迄見る處による

と、本來人間は、自分は正しい』と、自己を何處迄も主張するが性質なのである。誰とて自分が悪いとは思はぬ。私が自分の方が正しいと主張すれば、相手も矢張り自分の方が正しいと、斯くて何處迄も自己中心で個人として、國家として、團體として、階級として、何處迄も自分の方がよい』と、自分の方が善いとなれば、人の方が悪いとなるに決つて居る。そこで善し悪しの争ひが起つて、之が人間争鬭の絶え無い根源なのである。聖徳太子『十七憲法』には、忿を絶ら瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆なり。心有り。心各執るところ有り。彼是なるときは我非なり。我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎か能く定む可けん。相共に賢愚なること、環の端無さが如し。云々。



斯くて各自に自分の方がよいと主張して、これ丈  
けは堯舜以來今日に至る迄考へが動かぬのである。

### 九 『我』の人生

全體

佛教は茲に根本を据えて説き度いもの、——斯く人間  
が我慢の塊り故、これがある限り立てぬから、  
それを碎くのが佛教の無我なのである。斯くいふと、然  
ういふ前も我が佛教で言ふのだらう』そう思はれる  
かも知れぬが、これ丈けは私、それで無い積りて言ふ  
て居る。ちと言ひ過ぎになるも私は、  
西洋思想は我が折れて居ぬと思ふ。社會問題でも労働  
問題でも、自分等の考が正義だと主張することになり  
て居はせぬか。設ひ思想の上からでも、宗教の上から  
でも、自分の思ふのが正しいとなる時は、忽ちこの『我』  
がつく。故に佛教の人でも言ふ時に、我が法はなると  
ハヤ法に『我』がつく。併し  
之は誤解して貰つてはならぬ。私は今日起つて居る社

これを私は斯ういふ方面からは氣がつかなかつた。寧  
ろ何處迄も自分が善くし、無我にして、設ひ人に喰はれ  
ても不足が無い氣で遣りて行つて、  
それが結局大不足に出てしまつたので覺つたのであ  
る。すると今迄捨て、居たと思つて居た自分、一身、更  
に捨てられて居ぬ。自分は今迄これ程仕て來たのに、人  
が認めて呉れぬ。人がひどい。するとそれになつたは  
今迄のが、人に認められ度い爲め嗜んで居た善であつ  
たからであるから、人の善は面白く無く、自分の善を樂  
むは善を樂むで無くして、自分は善を仕たとの名譽を  
樂んで居たわけである。これで居て『自分は善く仕て  
居る』と、  
思つて居つたは自分が悪かつたと、茲になつて來たの  
であつた。

### 一〇 難行道なる意義

そこで何うであらう。  
之が難行道、自力といふことなのである。故に自力な

一四

會問題、労働問題、それを可かぬと否定するのは無  
いから。私はそんな無我なことは言はぬのである。け  
れども本來人間なるものが、何處迄もこの自分を本と  
してゆく、その外に行きやうの無い者が人間なのだか  
ら、それ故極端になると、今日如き

『人を喰べてもよい』とやうのことを、言はなくてはな  
らぬことになる。『若しそれがイヤなら喰はずに死ぬ覺  
悟せよ』それがイヤなら喰ふ覺悟をせねば』と、——で  
昨夜も或人態々神戸から聞きに來て、『それでも先生、  
何か人間に生れた使命といふやうなものが有りそうな  
ものですが。』私『イヤ然うだけど、そこになると、  
思つて居た使命も何も碎けてしまひ、何もかもが唯自  
分の生存の爲めに遣つて居たばかり。茲になると、寧  
ろこれ迄人に無我に仕て來たことを呪はねばならぬ程  
である』と。それ故『大經』五惡段には

強者は弱きを伏し、轉相剋賊して、殘害殺戮し、迭  
に相吞噬す。云々。

ることは、唯努力で行かうと仕ても、思ふやうゆけぬと  
いふ、それ丈けならばまだしもなのであるけれども、  
斯く如何なる場合でも一點の不足出さず、自分を犠牲  
にし得るならば、それは自分が善く出來たにもなら  
う。が今我々善く出來たと思へば、  
その出來たの思ひがはやそれ丈けの名譽、報酬を取つ  
て満足して居る心なのである。即ちそれが何處迄も、  
與へたものなら取り返さねば承知が出來ぬ性分。それ  
なら人に與へたにやらぬ、預けたといふものである。  
即ちそれ程一分一厘『我』が捨てられざる、何處も名利  
心、利己心の塊りの我々と、これが難行道、自力とい  
ふことなのである。そこで  
難行道は山を行くことになるから辛い。『イヤ山野を跋  
渉するのは困難もあるが、それ丈け愉快もある』と言  
はれるかも知れぬ。けれども物は取りやう、彼の山越  
えたらと思つて行つたら亦舊の山。この山越えたらと  
思つて行きたら又もとの山。そこになりて、

## 一一 老媪の求道

もう行く可き道が無くなつてしまつたのが私の氣のついたもどであつた。爾ら此の時西洋流に自分は正義だて何處迄も遣り通す。正しいものは死ぬても正しいと力んだなら、その時はもう死に行き詰まる外無つたかも知れぬ。けれども私はその時、斯く自分がよい／＼と思ふ。このよいが自分の我慢な本性だと、問題が自分の悪しさの方に轉んでいつて行き詰つたのであつた。夫れ故私など、之れ迄宗教の爲め骨折つてると、思つて居たのは、我が宗教の爲めやつて居つたのであつた。故に西洋人が我が基督教の爲めに骨折る。我が日本、我が宗派の爲めにやる人のあるは無理も無い。斯く宗教迄が「我が」の範圍に這入れば、「我が」の一字で資格が擧つてしまふのである。故にこれ迄宗教の爲めにやると思つて居つたは、皆んな自分の爲めであつたかと、茲て私は信仰も宗教も皆な碎けてしまつたのであつた。

茲て又話が一寸別れるが、今の美濃から来た婆さんである。此間來私が斯く色々意地目る。老人中々頭がよい。言ふことが頗る明快である。「先生はいかぬ／＼と仰しやるが、東京では極樂へ往けぬかも知れぬけれど、美濃に歸ると極樂へ往けるのだから歸る」と、頗る要領を得て居る。それを押えて何うしても歸へさぬ。いつか佐藤君が越後から母を連れて來て、息子の親切にほだされて信仰に入つた例など持出して、色々に話して聞かせる。すると老人「ア、先生がこんなに迄して留めて下され、息子がこのやうに迄して止めて呉れ、息子ぢやとて女房、子が國許に待つて居るに、私の爲めあんなに迄言つて呉れる。子供の爲めこのやうに迄して貰つて、有難い／＼と、その喜ぶが敢へて偽りて無い。けれどもその有難いは佛と別々になつて居て、聞く方に言つて居るので、頂いた方にはなつて居らぬ。それで私「イ

ヤ息子がそれ迄に仕て聞かせたがつて呉れる、その有難いのが慈悲の有難いのであることに氣をつけなくては」と、段々話すると、今度は「先生、どうか充分に

ぬ」と、これが本統の聲なのである。

## 一二 道樂者に金をやる如し

／＼と言ふ。初めは歸りたがつて居り、既に連れは飛んで歸つてしまつて居るのである。そこで私「この度びは息子が貴方の六十年來の聞き方を心配して、態々金使つて來て居るのだから」と、段々話して行くと、その中に「先生、何うも妙なことになりました。こんなりて造作せずに歸りたら、歸りてから仕末にいかぬから、何とかしませんでした」と、中々老人旨いことを言ふ。如何にも造作である。成る程今迄立派に建つて居た信心も極樂も、彼方がガタ々々、此方がガタ々々、これでは住へぬから手入れ仕無くてはならぬ。處が今朝になると「今迄造作と思つて居りましたが、今日は何も無くなつてしまひました。折角六十年來聞いて居た信心が何も無くなつてしまひ、この位なら東京に來ぬのでした。これでは取られに來て、空虚で歸らんなら

それは私が長い間、佛教の爲め宗派の爲めと、學問も何も總てを擧げて廿年來志して來た處のものが、皆んな、我慢の爲めであつた、名利の爲めであつたと、今迄の信仰が全碎けとなつて見ると、今迄のが本物で無いから碎けたは知つて居るも、そうなつて來ると残念で／＼思ひ切りがつかぬ。故に老人が惜しい／＼と思ふは最なのである。それは代はりの出來る迄は、腐つた家でも、代はりが無くては雨晒してある。それは私が現にそれであつた。そこになると唯出るものは愚癡ばかり。故に今朝も老人に申したのである。「それでよい。全體今迄妙なものが這入つて居たから可かぬのぢや。然ういふやうに、居る家も何も無くなつてしまひ、空虚の行き處の無いのを哀はれと言つて下さるゝ慈悲

ぞ」と。老人涙を流して喜んだ。そうかと思ふと又あとから惜しい〜と言うて居る。

それ程喜んだも矢張り今迄の聞き癖、腹は少しもふくれて居らぬのである。て今朝も申した。

『道樂者に金を遣るやうなものぢや、貴方に信仰をやると出来た〜と振廻はすから金はやらぬ。金は一文も遣らぬが、その身の寄せ所なき汝を、親は何處迄も養ひして行かうぞとの慈悲ぢや』と。

これが一生懸命の話なのである。それは皆様が信仰欲し〜と

信仰の金攫みに来て居られるのである。青年諸君など儘に攫みに来ておいて居る。そして

自分が親に攫まれて来て居ることを知らぬ。攫む思ひて来る故、何時迄も得られぬ〜になる。何ぞ知らん、その得られぬ空虚が可哀相と、その者を親の方から攫まふとのお慈悲である。故に先きの『文類正信偈』の、『難行の峻路を特に悲憐せしむ』である。

る、自分は恐ろしきものと、斯んな氣持ちがあつた。

爾らば人に打明けて『ウン、然うか。君はそんな人間か。そんな名譽心、我慢をやつて居るのか。』然う言はれると、『あゝ言は無つたら生かして置けたものを』と、茲が

ごまかせもせず、又ごまかし度く、まことに困つた處であつた。東京に来て居て昔風のごまかし信心でもい

かず、さればとて暴露して仕まつては惜しいになる。故にそこは老人、分り難い譯け。その時はあつた信心

がもう壞はれて居るのだから、信心ももう頂き度く無くなる。信仰にはもうこり〜した。信仰など聞いたから、こんなことになつてしまつたと、有難いも何も無くなつてしまふ。サアそこでもう信仰でも何でも無い。

唯私の欲しかつたは、自分が人に隔てを止め、我慢を止め、打ち解けられ、ばよいのであるけれども——之が即ち難行道——それが出来無いとなれば、もう外

### 一三 唯私の欲しかつたのは

處で私は何故老人の話を持ち出したか。態々美濃から信心取られに来て、もとの信仰が戀ひしいといふ、私がそれだつたからである。あゝ今迄あの通り、修養々々と積んで置いて、こんな馬鹿なことがあるものか。今迄生命懸けの苦心して打ち建て、置いた信仰。それはすつかり砂上の樓閣となつてしまつたも、もとの儘ならば自分も信仰家て居られたのである。それはいかさまの偽せ金であつた故、偽せ金は駄目だと言はれば、然うだとは分るも、それでも矢張り舊が戀しい。設えは偽物の繪でも、偽物と聞いて本物と思ふ譯けには行かぬも、矢張り舊の本物と思つて居つた時代が戀ひしい道理である。その時

私妙な心裡状態があつた。それは從來だと人に褒められると嬉しい。一旦眞實で無つたと分つてからは、褒められて嬉しく無い。あゝ自分はこんな我慢をやつて居るに、人が褒める。人はだまされて、人を欺いて居

のことは思はぬ。自分がこれ程隔てを止めやうと思つても止められず、我慢を出さずに置かうと思つても、自分の力ではもう何うにも仕やうが無い。これ程人に打ち解け度いと思つても、何うにもならぬとして見ると、もう自分は人に棄てられ、世に入れられぬ。そこになると自分のことの外に、もう何も無いのだから）さればと言つて、

自分はもう之から之がよくなれやうとは思へぬ。誰か世の中に、自分がこれ程止めやう、解けやうと思つても、止められず解けられぬに困つて居る所を、外の者は此方から隔てれば向ふも隔て、来るが

誰か一人友人ありて、それ程止めやう、解けやうと思ふても、止められぬは性分だからである。それは然ういふ疑ひ深い、我慢の強い性分と、そこを見て呉れる者ありて、『あゝ、あれはあゝいふ性なのである。

性なれば止められぬは、止められぬのが可哀相』と、茲が私が必ず言ふ所なのである。それは私心の中に、『我

慢は止めぬといかぬ』と必ず人言ふと思つて居るのである。『いかぬ』と言はればそれは當然故、何うにてもして止める可きだが、それが止め度いにも、止まらぬとなつて居るのである。故にお前はその止まらぬのが氣の毒だと、之が欲しくてなら無つたのであつた。茲はいつもの電車道に倒れて動けぬのを哀はれみて下さる例でいふと、『あれは動かぬので無い、動き度いにも病氣で動けぬのだから、氣の毒』となるのである。故にそれが分ると『そこを見て呉れたのか、有難い』となるのである。それは動けぬのが氣の毒と見た上は、動けぬのをその儘捨て、置くといふことは無し。

『宜しい、自分が肩にかけて負ひませう』とか、何とか、何うしてもそこに出て來ねばならぬ。故に『歩けぬのが氣の毒』と見て呉れるといふ、茲が一番の急所である。所が今の老人にすると、

動けぬのが氣の毒といふ、それだけでは有難く無い。

狂ひなら可哀相』となるかも知らぬが、人を撲つて、撲たれて有難い者は一人も無い。故にこのやうに私が隔てる故、

いかぬ／＼と、皆んなが屹度然ういふてると思つてゐるのである。その中に一人なりとも、『イヤ、いかぬは、いかぬけれど、あれは生れつき故止まぬのぢや。止まぬとすれば氣の毒なこと無いか。金費ふは、いかぬもそれが生れつき故、その生れつきが可哀相ぢや。』と、之が親心なるものである。處がこれ言ふと今の老人』それは、らくぢやな』と、

らくぐらゐでは茲をこんな言はぬで無いか。それを皆んながそんな聞きやう仕て居るから、『このお慈悲頂いた上は出來るだけ謹みます』と、そんなことになつてある。『謹むと言つて、それがあなた謹めますか』

『イヤそれは謹めることも有りませうが』と、そんなことになつてある。全體

私の話をそれに聞いて居る人が澤山ある。『先生のは謹

そんなことは普通である。もつと何うか五割増をとなつて居るのである。處が今電車が來るに動けぬといふ時に、『あれは動けぬのぢや、氣の毒』と、この見て貰へた一言が有難いとこなのである。處がこの深きお慈悲の所が、分つた如くして容易に分らぬ。殊に今迄眞宗聞いて居つた處の人は、聞き分けねばならぬになつて、このお言葉が本統と頂かれぬのである。茲は少し申さねばならぬ。

一四 私の話が多くが聞き違えて居る。又私の苦しんだ時の話に戻るが、私の苦しんだのは、そうなる何うしても人に隔てが止まらぬ。その時にはもう誰、彼無しに、誰にても隔てるのである。隔てられて有難い人は一人も無い。此方から隔てれば向うも隔てるに決つて居る。狂ひが狂ひの故に往來て人を撲つ。此方は狂人も撲たれた人は知らぬから、怪しからぬといふに決つて居るのである。それは誰か横から、『君あれは狂ひぢや』『ウン然うか、狂ひか、

しめぬのが氣の毒、喜べぬのが哀はれとのお慈悲ながら有難い』と、そんな風に徹底せずに聞いて居る人が幾らもある。らくな話と思つて居る人が幾らもある。

#### 一五 『働かいてもよい』は可かぬ

自分で話した乍ら有難いと思ふから又しても言ふ。それは例の不具の子供で安心した婆さんの話である。あのお婆さんは長いこと外へ聞きに行くと『信仰の上は斯うせねばならぬ、あせねばならぬ』それ言はれて困つて居つた。處が茲へ聞きに來たら、『その出來ぬのが哀はれ、いかぬが可哀相』と、これ聞いて、『これは、らくなお説教ぢやな、誰も來い、彼も來い』と皆なを連れて、それで三年聞きに來て居つたのである。處が三年目に或時の話に私が、『自分が困つて居る時に親切な人から金費ひて、マア之で働かいてもよいでは、おかしいて無いか。この働かいてもよいは可かぬ』と、之に先づ不審が起つた。次に私が、『全體

働いてもよいは、働くことの出来る人間の言ふ言葉である。吾妻橋の上に行く、澤山な食糧が金下さいといふて居る。金やると有難いと言うて居て、人が行つてしまふと煙草飲んで居る。

あれが働かいてもよいといふものぢや。働かいてもよいでは無くて、働かうにも働けぬのだらう。手も足も棒になつてしまつて、働かうにも働けぬのが可哀相だから、故にその働けぬのが哀はれとお慈悲である』と。これ聞いても、う婆さん、何が何やら薩張り分ら無くなつてしまつた。『働けぬから哀はれ、働かいてもよいでは可かぬ』——家に歸つて小供に食事させながらも『働かいてもよいはいかぬ、働けぬから可哀相』——茲て話きいて表へ出て、そればかりになつて居るもの故、道で着物をよごしてしまつた。それ程に婆さん、非常な心配したのである。之は皆様分りますか。分つた積りでも

茲はなか／＼分りませぬぞ。大抵が『謹まうと思ふて

も謹めぬ。謹めぬを見て下さるから有難い、／＼。』それになつてしまつて、分つて居らぬのである。故に眞宗の信者は『働けても働かぬ』妙なものになつて居る。そこは寧ろ世間の働かぬば喰はれぬの方が弊が無い。

#### 一六 不具の子を持つた親の心

處がこのお婆さんが氣がついたは、いつも言ふ、隣りに七つの時から僮僕になつて、體の屈んだ小供が居る。或る時その家の前を、十六七の學校歸りのお嬢さんが、手をつなぎ合つて歸つて行つた。僮僕の子供の居るのを見て、『あれ、あすこにあんな不具が居ます』そういふのを聞いて、その子供は厭な顔して居た。すると何うしたことかお嬢さん達の方は、『あんなのが居る／＼』と、互に袖ひき、指差して、窺き込んで通つて行つた。子供の方はたまらなくなつて、ワツと泣き出してしまつた。一方を聞いて居た母親の方は、奥の方から飛んで出て、その子を抱き上げ、涙をホロ／＼出して、『お前が不具だから、皆さんが不具だと言

ひなさるのぢや無いか。だから、お母さんがこの通りに可哀がつて上げてるので無いか。』子供の方には然ういふて、通つて行つたお嬢さん達の方に向ひて大聲上げ『生れだてからの不具は無いわい！』——今のお婆さん、この有様を見て居て、『成る程私が不具だつたのである。先生が働かいてもよいは、働ける者のいふことだと言はれたが、成る程自分が働かぬ、喜びもならぬ不具であつた。だからこの不具が可哀相と言うて下さる親のお慈悲であつたか』と。——爾るに之を『らくな』など、らくな位なら自分の不具が分つて居るので無い。又或人は『不具を哀はれと言はれると聞くと、よけ不具になつて、よけ可哀がられやうかと思ふ』などと、總て他力の考へ方の間違つて來るは、茲の分ると分らぬとである。今不具の子の母親が、子供を可哀がつて、しるに背負ひ、大聲上げて『生れだてからの不具は無いわい！』生れだてからとそうて無いと、別に區別は無いやうであるも、即ちそれ程に不具の私のこと

を憐み、思うて下さる親の心である。故に『難行の險路を特に悲憫せしむ』が佛の慈悲。その不具の便無き人に指差され、笑はれるばかりの、誰も相手に仕て呉れぬ汝故、その汝を抱き上げて何處迄も／＼捨てぬぞの御眞實が、之が本願一實の大道なることなのである。

#### 一七 特に悲憫せしむ

そこで今的美濃から來た御老人に一言する。『貴方は仰上の不具になつて歸るのが残念だ／＼と言ふも、私は信仰の不具になりて、その私の片輪を哀はれに思ふぞとの佛の大悲を聞いて安心したのである。夫れを貴方は唯可哀相だけでは困る、善くして下さらなくては。この根性があるから、不具になつたのを残念に思ふのであるも、その片輪の貴方をそれ程に思うて下さるお慈悲を聞けば、その貴方の片輪をそれ程迄に見て下された、それが有難いのでないか。』それが易行の大道といふことなのである。すると何だか世間には、随分立派な人もあるやうに思へるも、

佛の眼よりは一切衆生が皆な片輪。一切衆生悉有佛性といふ上よりは、何だか一切衆生が皆な自分で佛になれるやうに思へるも、それは間違ひである。何處迄も人に呆れられる片輪の者を、その片輪に生れついたが可哀相故何處迄も捨てぬぞ、呆れぬぞ。この御眞實には如何なる不具も救はれぬ者無いから、一切衆生悉有佛性なのである。即ちそれ程迄に見て下さるお慈悲の下には如何なる不具も腹ふくれて、誰一人見て呉れての無い私なるも、このお慈悲一つに生さるのである。即ち信仰とはこの不具が佛のお慈悲一つに生さることである。それは不具は不具ではいけぬと思つて居るのである。處がそのいけぬのが可哀相故、そのいけぬのを殊に遣る瀬無く思召す。即ちそれが『難行の峻路を特に悲憐せしむ』である。難行道ではいけぬから、いけぬとこを特に見て下されたお慈悲である。即ちそれが『易行の大道を廣く開示す』である。そ

こは『歎異鈔』九章には  
 なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそまいるたきころのなきものを、ことにあはれみたまふなり。  
 とか。

佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり。  
 とか。或は  
 彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、親戀一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。  
 とか。この不具を特に憐みて見捨てぬとの御眞實一つが有難いとなるのである。(同上)

# 選擇本願の行信

「正信偈講話」四 (行卷末より)

## 第二席

近角常觀

凡就誓願有眞實行信亦有方便行信其眞實行願者諸佛稱名願其眞實行願者至心信樂願斯乃選擇本願之行信也其機者則一切善惡大小凡愚也往生者則難思議往生也佛土者則報佛報土也斯乃誓願不可思議一實眞如海大無量壽經之宗致他力眞宗之正意也是以爲知恩報德披宗師釋言夫菩薩歸佛如孝子之歸父母忠臣之歸君后動靜非己出沒必由上知恩報德宜先啓又所願不輕若如來不加威神將何以達乞加神力所以仰告上爾者歸大聖眞言闍大祖解釋信一知佛恩深遠一作正信念佛偈曰

### 一 眞實の行信、方便の行信

一 實は今日『選擇本願の行信』なる言葉を以て題としたのは、今席之より聞いて頂かうとする、

『凡そ誓願に就て眞實の行信有り。亦方便の行信有り。其の眞實の行の願は、諸佛稱名の願なり。其の眞實の信の願とは至心信樂の願なり。斯れ乃ち選擇本願の行信なり。』

正しく茲に在る處の言葉によつたのである。この眞實行信の御示しが一言なれども甚深の味ひある處にて深く意を留めて頂かねばならぬ所である。

二 先づ何れより言はんか、斯く茲に『誓願に就て眞實の行信あり、亦方便の行信有り』とはつきりしたことが仰しやつてある。こは一體眞宗の教義と言はんか、眞宗の教への筋道を研究せられた程の方は皆な御承知のことであるが、斯く聖人は、眞實の行信、方便の行信とやうに、はつきり分けても示しになつて居るのである。行信で申してもよいが、も一つ言へば佛の願に眞實と方便とがあると、斯く分けても知らせになつて居るのである。處て今の眞宗の教義を聞かれた程の方は眞實の願、方便の願と申しても、直ぐ御了解下さるのであるも、一般の、殊に専門的に聞かれたことの無い方は、それでは意味が分らぬ場合もあら

ふ類の問題は眞宗の立て方は斯くくと、版木で押しだ言ひ方をするから變になる。『求道會館に來るには本郷通りから來るが本道である。併し指谷町からても來られる』と、入らぬ指谷町を言はれたばかりに迷ひやすいやうに思ひ易い。こゝは聖人のお知らせ下された御眞意を頂くとして、極めて肝腎な點なのである。

### 二 淨土宗といふ念佛の意味

五 ところでこは法然上人が他力を説き下された時は、斯のやうに『十八願が眞實の願である、十九、二十は方便』と、はつきり分けて言はれたと言つてもよけれども、マア言はれ無つたと言つた方がよい。それを何故親鸞聖人がかつきりさせられたかといふ、之を充分味はせて貰ふと、茲の意味合ひが明にさせて貰ふことが出來ると思ふのである。

六 ところでマア今日も前席來類に信仰問題を喧ましく申した故——斯く私が始終『徹底仕なくてはならぬ』、『心からの南無阿彌陀佛を稱へなくてはならぬ』といふと、如何なる感じを皆様に起させるか。皆様が『如

うし、又從來宗乘として方便眞實を言うて居る、その言ひ方にも、私除り感心せぬ見方もある。

三 それは眞實の願とのことは、眞實の佛の恵みを頂かせるやうに誓うて下された處の願とのことである。方便の願とはその眞實の恵みを頂くて無しに、方便の文字に表はれて居る通り、假りに我々を手引きし導く爲めに、立て、下されたが方便の願とである。處て從來の眞宗を聞いて居る處の人が之を、『十九、二十は方便の願である。眞實信心の願は十八願と斯く無雜作に言うて居る癖がある。』

四 處が考へて見られよ、をかしな話。眞實の慈悲さへ頂かせればそれでよい筈であるに、何の故に方便の假の道をこしらへたものであるか。殊に從來の聞き慣れの人は、十九二十は、あれは定散自力の方便の願と、ひと口に言うて仕まつて居るのであるが、それならそんな眞實で無いものを、態々作つて人を迷はせぬでもないかと、人に迷ひを與へる具合に迄穿き違へが出來て來る程にまで、その處の言ひ方がなつて居るのである。全體斯うい

何にすれば、その如くに徹底することが出来るか。眞の念佛を稱へることが出来るか。何うかしてそこに乗り度い。なることが出來たら』と、普通には先づ斯く思はれるその心が既に方便の行信と、斯ういふことになるのである。これは全體方便と眞實と之は本物、之は似せ物と、二つ與へるやうに言ふから迷はずことになる。併し從來聞き慣れの信者の方には茲が然ういふ風に映つて居る。

七 ところで先づ法然上人の示された南無阿彌陀佛の念佛といふことにしてからが、南無と言ふは即ち是れ歸命、亦是れ發願廻向の義也。善導大師が斯く言はれた本來の意味からいふ時は、南無は即ち此方から佛に向ひて歸命する意義である。故に亦發願廻向する意である。故に他の經文を讀む時には、之に更に廻向文を附けて、この讀んだ經を向ふに廻らし廻向することに仕無ければ意味を爲さぬが、南無阿彌陀佛は既に南無が歸命、亦是れ發願廻向の義であるから、諸善には廻向文を附ける必要があるが、南無阿彌陀佛にはその要が無いから附け無い。故に南無

阿彌陀佛は不廻向である、南無が既に廻向なのだからと、之れ丈けのことだつたのである。故に南無阿彌陀佛は、南無阿彌陀佛々々と稱へて、此方から廻向するのだと、斯ういふことであつたのである。

八 故に法然上人の教を聞かれた他の弟子方にする時は、上人が南無阿彌陀佛々々と稱へられる一聲々々が廻向の念佛である。我々此方の方から發願廻向して『助け給へ』てやるのだと。故に淨土宗の如き、心に『助け給へ』を存して、口に念佛すると、斯ういふことになつて來たのであつた。

三十九、二十の願の意義

九 處て之て本統に安心が出来るかといふに、『助け給へ』といつ迄も稱へて居る丈けては、何時迄稱へて居らうが、石童丸が親を捜す思ひで、何程親を慕ひて南無阿彌陀佛と呼び、稱へやうが、夫れては何時まで安心することが出来ぬ。即ちそれが親鸞聖人より言ふ時は、いつ迄も安心のされぬ信仰状態て、故にそれを聖人は

十九、至心發願の願と知らせ下されたのであつた。至心に發願するとは、此方より發願して助け給へ、石童丸が親を捜す思ひで何程念佛するも、それは何時迄も安心されぬで無いか。それでは石童丸が高野に親を捜しに捜して、面の當り遇つて居ながらも、終に遇ひ得無つた様となる。

一〇 處が若しやその時親の方より一言聲掛けて、『汝の方より我を求むるに非ず、我汝を待つこと久し』と、親の方より聲掛けて呉れる時は、その求めに求めて安心出來無つた者が、その端的に安心されるとなる。故に此方より南無阿彌陀佛と捜す念佛では安心されぬも、親鸞聖人は南無が歸命の義であるといふ歸命とは

歸命といふは本願招喚の勅命也(行卷)佛より呼び掛けて下さる廣大の恵みとなつた處で、初めて徹底させて貰ふことが出来るとなつて來たのである。

一一 故に法然上人の示された言葉の表面上の解釋より言ふ時には、淨土宗で今日言ふて居るやうに言ふ方が寧ろ本統であ

る。淨土宗でいふ處の臨終正念にせよ、又西山流の曳々掛け聲かけて材木を運び込む如く、南無阿彌陀佛々々と念佛稱へて、臨終の一念まで持つて行くのだといふ言ひ方にせよ、それはさういふ風に考へるのが文字上よりしては、寧ろ當り前なのである。けれどもこれでは心に何處迄も眞の安心が得させて貰はれぬ。

一二 そこで斯く親鸞聖人になると、もと善導大師が南無は歸命と言はれた、その歸命とは此方の方より、よりすがり、より頼み、手索りに捜し求め、呼び立て、泣き呼ばふ南無阿彌陀佛にあらず、それだと如何に切に、如何に急に呼び求めやうが寂寞の苔の岩屋の静けさに

涙の雨のふらぬ日を無き。いつ迄も眞の安心に到達しえやう期は無いが、その寄る邊無き様なることを悲みて、大悲の心遣る瀬無く、親の方より姿を現はし、呼び掛け、待ち受けて下された招喚の勅命が南無阿彌陀佛である。故にその者がこの眞の親心を聞くと、難有やと念佛申さんと思ひ立つ心の起る、即ち念佛とはこの念佛のことであると、斯ういふことになつて來たのである。

一三 處てこのことを知らずに念佛は此方より稱へて捜すこと、とすると、その咎は佛の本願の方に在るので無い。此方の方の穿き違へにある。處が直ぐその自力根性に出る機が我々の性分に在る故、その者を可かぬと斥けずに、さういふ風に自力ごころで念佛する、その者をば親の方からは導き、手引きする爲に、

十九、二十の願を建て、此方より親に遇ひ度いと念佛するは、それで安心のされやうは無けれども、それを手引きとして、最後に持つて行つて下さるは何處であるか『汝その如く親を尋ね、捜し走るのであるけれども、汝の方より捜し求むるに非ず、斯く既に汝一人が見捨て難き爲め親の方より現はれ、待ち兼ねて居るで無いか』と、之が十八願の意となるのである。故に十九、二十は我々の心に、然ういふ信仰状態をとる素質がある故、その者を導きて眞實の恵みに行かして下さる爲めに建て、下された方便の願と、斯ういふことになつて來たのであつた。



一四 故に形の上より言ふ時は、善導、法然の言はれた處には、寧ろ淨土宗の方がよく當りてある。けれどもそれは眞の安心にはなれぬ故、親鸞聖人の言はれたは、法然上人の言はれた念佛とは、そのやうに此方より投し求める念佛では無い。發願廻向とは我々より自分の心を雜へて發願廻向することでは無く、佛よりして、我々を投し求めて下さる如來廻向である。故に發願廻向とは如來已に發願して、衆生の行を廻施したまふの心なり。(行卷)

四 法然上人より親鸞聖人に至りて

一五 處て皆様は形は眞宗であられても、心が淨土宗になつてあられたら、法然上人とは大分向きが違ふことになる。皆様は形に口稱の念佛はせられなくても、心に『も少し喜べることになつて來たのが親鸞聖人の淨土眞宗である。』

たら、徹底出來たら、頂けたら』と、それて佛を喜んで居られるのであつたら、それなら『助け給へ』の念佛と同じことになる。前席で申した  
十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀と名づけけたてまつる十方微塵世界の念佛の衆生を攝取して捨てぬとあるに、助け給への念佛では、何處まで行きても攝取不捨といふことの有りやうが無い。攝取不捨は第十八の眞の親心の恵みが分りて、初めて恐入りて助け給へとなつたので無ければ、無いことなのである。故に然ういふやうに何程求めても、我々自分からするのでは、何處迄行きても果てし無きことを哀はれみ給ひて、その者を飽く迄も捨てぬぞと、佛の方より廣大の恵みを起し、我々に差向けて下されたのが眞實の行信、處がその眞の恵みを頂かずして、何時までも親投しの念佛を行じて居るのが方便の行信と、斯ういふことになるのである。

一六 これは既に法然上人の御時代にも信不退、行不退の問題があつて、行にも方便と眞實と

があつて、行とて強ち自力には限らぬも、行不退の場合の行は、自力の行だつたのである。それは法然上人の南無阿彌陀佛々々と、念佛し給ふ如く、その如くに念佛するのだと、行の如くに心得て念佛して居つたのが行不退である。處が後にも申すが、法然上人の念佛せられたのは、そんな自力心の念佛では無い。彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をばとぐべし信じて、念佛まふさんとおもひたつ心のこゝる時、攝取不捨の利益にはあつつけしめたまふなり。

(歎異抄)

『……信じて念佛申さんと思ひ立つ心の起る』その信が肝腎故、法然上人も信不退の座に着かるゝとなつたのであつた。

一七 處て茲に『誓願に就いて眞實の行信有り。方便の行信有り』——我々の行信に眞實の行信と、方便の行信と、二つあるぞと、斯く判然書き分けて示された、茲が聖人の著しき處なのである。何うも聖人には一面非常にはつきりした處がある。我々親鸞聖人と聞くと、何處かポツとした處があらせらるゝやうの感じを持つのであるけれども、御書き物を拜見す

ると、實に齒切れのするやうな心地よい處がある。一八 斯く『我々の頂く信心にも、喜ぶ念佛にも、眞實と方便との兩方がある』と、如何にもかつきりと之は法然上人は然ういふやうにはなされて居無い。それは元來この品は舶來品だといふときは、それに紛れのあるべきではなかつたのであつた。處が段々近頃になると和製の舶來といふ奴が出來て來た。

一九 その如く法然上人が初めて眞の念佛を仰しやつた時には、念佛に自力の、假の、方便のと、そんなことがありやう話では無つたのであつた。處が法然上人が眞の念佛を頂いて、喜んで念佛して居らるゝ、その様を見た者が我もゝと、形で眞似してこしらへて行つたのが、皆な偽せ物を作ることになつて行つたのである。故にそれが和製の舶來、故にそれが方便の行信と。故に法然上人は念佛に、本統の舶來と和製とがあると、そんなことは仰せられなかつた。法然上人の眞似することになりて、方便の行信なることは起つて來たのである。

## 五 聖覺法印

二〇 處でも一歩進みて、元來この

眞實の行信なる問題が容易なことで無いのである。

それは斯く『其の眞實の行の願は、諸佛稱名の願なり。』

其の眞實の信の願とは、至心信樂の願なり』——斯く

眞實行の願は、第十七の諸佛稱名の願である、眞實信

の願は第十八の至心信樂の願であると、二つ並べて書

き、次に

『斯れ乃ち選擇本願の行信なり』——茲一語實に言ふ

に言へぬ有難い處なのである。即ち先きより申して居

つたのが、皆なこの眞實行の行信の關係に涉つて居つた

ので、こは古來

眞宗の教義を學問的に味ふには、一つの難關とせられ

て居る處なのである。又青年の方が信仰得度いゝて

はつきりせられぬにも、茲をも少し申して見たらと思

ふ故、年々であるけれども、聞いて頂かうと思ふので

ある。

二一 話が色々になるけれども、先づ第一に

眞實行の願は第十七の諸佛稱名の願であるといふ、こ

れが一寸案外で、分り難い處である。そこでマア成る可く分り易く單純に申すとして、こはこの次席で申すとよいのであるも、何もそう區切りする必要も無い故、茲で聞いて頂くとして、それは

法然上人の『選擇集』で説かれた御教化を申述るとなるのである。

二二 處でそれを申すに直接『選擇集』を拜讀すると

よいのであるけれども、その法然上人の弟子に

聖覺法印なる方があつて、親鸞聖人が叡山で華嚴など

を研究せられ時々の友達である。して聖人が善財童子

が道を尋ねて苦んだが如く、十九歳磯長の御廟で太子

の勸めて、二十九歳迄求めに求め、それが結局聖覺法印

の手引きて、法然上人にお遇ひになつたとなつて居る

のである。それは六角堂參籠の歸りに、四條の橋の上

で聖覺法印にお遇ひになり、法印が聖人が御苦勞の様

を聞いて、自分も法然上人に聞いて居るから、貴坊も

行つて聞けと。そこで

建仁第三春の頃聖人吉水入室となつて居るのである。

故に聖覺法印なる方が

聖人と法然上人との間の橋掛となつて居るのである。

と二緒にして、嘗つて私の方からも出版したことがあつた。

## 六 「唯信鈔」文

二五 そこで『唯信鈔』を初めから二三枚讀まして貰つて見やうと思ふ。

それ生死をはなれ、佛道をならむとおもはむに、ふたつのみちあるべし。ひとつには聖道門、ふたつには淨土門なり。聖道門といふは……なにのゆへかそこばくの行業慧解をめぐらして、この小報をのぞまむや。まことにこれ大聖をさること、とちきにより、理ふかく、さとりすくなきがいたすところか——。

二六 さて之からが肝腎の處である。

——ふたつには淨土門といふは、今生の行業を廻向して、順次生に淨土に生じて、淨土にして菩薩の行を具足して、佛にならむと願するなり。この門は末代の機にかなへり。まことにたくみなりとす。この門にまたふたつのすぢわかれたり。ひとつには諸行往生、ふたつには念佛往生なり。諸行往生といふは、あるひは父母に孝養し、あるひは師長に奉事し、あ

二二 故に聖人と法然上人との關係を知るには、この聖覺法印なる方の中に入れると分りよい。それは法然上人が『選擇集』の御教化の意味を、聖覺法印が『唯信鈔』の中に書いておいてになる故、それを一應讀んで見やうと思ふのである。『唯信鈔』はマア誰様も御承知の書。それに文章が如何にも綺麗である。

二四 殊に甚しきは、『唯信鈔』は聖人が東國御苦勞の時、聖覺法印が態々書いて送つたとの説すらある。それは聖人が『唯信鈔』の奥書きに

寛喜二歲仲夏下旬第五日、彼の眞筆の草本を以て、愚禿親鸞之を書寫す。

と誌しておいてになる。東國御苦勞中の聖人が、眞筆の草本を以て書いて居られるのは、恐らく安居院に居た聖覺法印から、眞筆本を送られ、持つて居られたものだらう。すると法印が態々書いて送つたのだらうといふ説である。否定すべき程の材料も無ければ、立てる程の材料も無い。が兎に角、聖人は始終『唯信鈔』を讀めくと弟子にも仰せられ、又自ら『文意』を書いてお出でになる程である。『文意』

るひは五戒八戒をたもち、あるひは布施忍辱を行し、乃至三密一乗の行をめぐらして、淨土に往生せんとねがふなり。これみな往生をとげざるにあらず、一切の行はみなこれ淨土の行なるがゆへに。たゞこれはみづからの行をはげみて、往生をねがふがゆへに、自力の往生となづく。――

何うもこの邊聖人程には、つきりして無い。故に後に聖人が、方便の行信だとはつきりさせて下さらなければならぬことになつて來たのである。

――行業もしをろそかならば、往生とげかたし。かの阿彌陀佛の本願にあらず、攝取の光明のてらさゞるところなり。――

二七 次に

――ふたつに念佛往生といふは、阿彌陀佛の名號をとなへて往生をねがふなり。これはかの佛の本願に順するがゆへに、正定の業となつく。ひとへに彌陀の

偉いことになる。

二九 處が『汝、外の諸行の派手なのを着ぬから、偉いこと仕て居るといふ氣で居るのであるも、外の着物が着れる汝か、着れぬ汝か考へて見よ。汝は着れる氣で居る故、言ふこと聞き、よいこと仕て居る積りて居るのであるも、亂暴者の、汗ビツシヨリの汝に、何が外の着物が着れるものか。何一つ着れる着物の無いことを哀みて、その汝に着させやうと、親が長々骨折りの手織りの一枚の着物ぞ』と、之を言はれると、初めて『そいふお心であつたか。自分は着たことを順ふのだと思つて居つたに、この外の着物の着れ無い、泥凡夫の汗だらけ。この仕方なき自分に思ひがけなく着せやうとの、親が長々御まことの手織りの念佛であつたか、有難い』と、之になつたのが即ち信順である。

三〇 故に淨土眞宗は信順の宗教である。親の言ふこと聞きの教では無い。斯く親が外の着物が着れやうが無い爲めに、その者を御見捨て無く、着せやうとの御親切。之が分ると『これ迄外のが着れるやうに思つて居たのが間違

願力にひかる、がゆへに、他力の往生となづく。――之は彼の佛の本願に、諸行の者を照らすと無い、唯念佛の者丈けを救ふとある。故に南無阿彌陀佛々々と専ら名號を稱ふるのは、彼の佛の願に順ふのだと。これは即ち前日『絶對不二の教機』で申した處の順逆對――本願に順ずると、逆らふとの問題である。順ずるとは今念佛は、本願の仰せ通り、その通りにするの故、順ずるのだとなるのである。

七 淨土眞實の行

二八 處でこの順ふにしても『佛が南無阿彌陀佛を稱へよと言はれるから、稱へるのである。親が諸行はせなと言はれるからせぬのである』と、これになると、之は從順である。これだと自分は親の言ふことをさ、偉いことを仕て居る立場になる。俺は親の言はれることを素直によく聞いてる』といふ、言ふこと聞きの順ずるに直る。親が自分の爲に、この

親が手織りの着物を着よ。俺は言ふことを聞いて、外の諸行の派手なのを着無い、親の手織りの念佛を着て居る』といふ、着て居る自分の言ふこと聞きの方が、ひてあつた。爾るにこの着られぬ者に着させやうとの

お心が有難い』と、この一念には思はず着ずには居られなくなつて着るのである。故に茲になりて初めて着物が御眞實といふことになる。爾るに先にいふ『親が着よといふ故着ました』では、着る着物に價は無くして、着て居る人間の方に功を認めることになる。故にこれになつたのが先きいふ行不退である。自分の着て居るに目が着く故、形は從順であつても、自分は善くして居るの腹である。三一 故に法然上人が、南無阿彌陀佛々々と念佛せよと言はれる。他のお弟子方はそのお言葉の如く、念佛が自分の行になりて、着て居るに功を認めるになつて行つた故、聖人は『着てる』と、着てるに功があるやうに言ふも、マアその着物を能く眺めて見よ。この着物は親のお授けて着る着物では無いぞ。如何なる着物でも間に合はぬ汝故、その垢だらけの不まことの汝に、着させ度い／＼の眞實を以て、親が長々の骨折りて織上げ仕立て上げて下された、親の眞實の塊りの着物ぞ』と、そこで

之が眞實の行といふことになるのである。之が宗乘よりいふと極めて味の深い所。それは着る可き着物の念佛は渡さるゝの故、その渡された着物の念佛は斯く親の眞實の塊り、眞實の行となるのである。

三二 猶ほ言ふと、こは『行卷』の初に、  
諸佛稱名之願 淨土眞實之行 選擇本願之行

とある。之が昔から分り難い處になつて居るのである。何故かといふに、行といふと誰しも稱へるものとの思ひになつて居るのである。現に『行卷』の初にも、謹て往相の廻向を按ずるに、大行有り、大信有り。大行といふは、則ち無碍光如來の名を稱するなり。とありて、稱へるとあるからは稱へるもの、着るとあるからは着るべきものと、なつて居るのである。その南無阿彌陀佛と稱へる着物を攫えて、『諸佛稱名の願、淨土眞實の行』そして又一方には『選擇本願の行』と、何だか茲少し分り難いとなつて居るのである。

三三 けれどもその意味は、斯く外の着られぬ者に、着せ度いゝて作り上げて下された親の手織りの着物である。けれども茲に着るとあるは、苟も

三四 そこて今の『唯信鈔』文になりて

——そもく名號をとふるは、なにのゆへにかかの佛の本願にかなふとはいふぞといふに、そのことのおこりは、阿彌陀如來いまだ佛になりたまはざりしむかし、法藏比丘とまふしき。そのときに佛まししむかし、世自在王佛とまふしき。法藏比丘すでに菩提心をおこして、清淨の國土をしめて衆生を利益せんとおぼして、佛のみもとへまいりて、まふしたまはく、われすでに菩提心をおこして、清淨の國土をまうけむとおもふ。ねがはくは佛わかたために、ひろく佛國を莊嚴する無量の妙行をしへたまへと。そのときに世自在王佛、二百一十億の諸佛の淨土の人天の善惡、國土の巖妙をことくこれをとき、ことくこれを現じたまひき。

茲らは明日の席ていふ『正信偈』の始めに、  
法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在して、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を視見して、云々。  
とある處である。

三五 法藏比丘これをき、これをみて惡をえらびて

着物とあれば着物は着るべきものに決つて居る。墨んで眺めて居る着物といふが有る可きでは無い。故に念佛は南無阿彌陀佛々々と稱へべきもの、如來御廻向の行として、させて貰ふべきものと、それは決つて居るのである。けれども親が、着られぬ汝に着せ度いと作り上げた、親の眞實の塊りとあるに、だから我々着ねばならぬ」と、此方が力みて着るといふことは有る可きで無い。然ういふ親の眞實の塊りであつたか、有難い」と、その作りて下された親の眞實が頂けて、初めてその着物は着れるとなるのである。故にその親の眞實の徹したのが眞實の信。而してその信は着物なら着られぬ者に着させやう、粥ならば喰べられぬ者に喰べさせやう、その親の心も頂けたのであれば、行は自から南無阿彌陀佛々々と、稱へることとなるのである。けれどもそれは此方の稱へる機より、稱へることは無いとなるのである。

八 淨國建立の起源

善をとり、巖をすて、妙をねがふ。たとへば三惡道ある國土をば、これをえらびてとらず、三惡道なき世界をばこれをねがひてすなはちとる。自餘の願もこれになすらへてこゝろうべし。

これは諸佛淨土の中に、或は三惡道あるの土があり、又無きがある。惡しきは悉く選び捨て、善ばかりして建て度いが御精神故、即ち第一願には、設ひ我佛を得たらんに、國に地獄餓鬼畜生あらば正覺を取らじ。

さて三惡道は無くしたも、又歸つては可かぬから、第二願には、設ひ我佛を得たらんに、國中の人天、壽終りて後復三惡道に更らば正覺を取らじ。

斯く或は、或る淨土には天眼通あるの土があり、無きがある。又他心通あるの土があり、無きがある。あるは悉く之を取り、無きは悉く之を捨て、一々斯くして我々に眞實の満足を與へるやうにと、誓つて下されたが四十八の願である。これ抑々他力眞宗の起源である。

三六 即ち斯くして

——このゆへに二百一十億の諸佛の淨土の中より、すくれたることをえらびとりて、極樂世界を建立したまへり。たとへばやなぎのえだにさくらのほなをさかせ、ふたみのうらにきよみがせきをならへたらむかとし。これをえらぶこと一期の按にあらず、五劫のあひだ思惟したまへり。

斯くの如く柳の枝に櫻の花を咲かせ、二見の浦に清見が關を並べたるが如く、有らゆる勝れたるものをのみ選び取つて、造つて下されたが、清淨眞實の御淨土である。これが皆み苦海の衆生を哀れみ、その者にその苦を除き、眞實の樂土を與へ度いと御慈悲の外に無いとなるのである。

### 九 選擇本願念佛

三七 處て斯んなことを話すと、青年の方にはこの世の事にならぬから、分りにくいと思はれやうが、之が即ち絶對界の様を表はしたものである。けれども佛の本願は絶對そのものを言うたものに非ず、この迷ひの我々をしてその土に生れしめるにあるのだから、即ちその絶對界から、我々のこの人生に連絡を着ける

ことにありて、即ち絶對界から相對界への連絡の連絡そのものが宗教となるのである。而して、それが即ち第十八願となるのである。

三八 ところで『唯信鈔』この次ぎには  
——かくのことく微妙嚴淨の國土をまうけむと願して、かさねて思惟したまはく、國土をまうけることは衆生をみちびかむためなり。國土たへなりといふとも、衆生むまれかたきは、大悲大願の意趣にたかひなむとす。これによりて往生極樂の別因をさためんとするに、一切の行みなたやすからず。孝養父母をとらむとすれば、不孝のものはむまるべからず。讀誦大乘をもちむとすれば、文句をしらざるものはのみがたし。布施持戒を因とさだめむとすれば、慳貪破戒のともからはもれなんとす。忍辱精進を業とせむとすれば、瞋恚懈怠のたくひはすてられぬべし。餘の一切の行はみなまたかくのことし。——  
これがこの着物の着られぬ者の爲に、此の着物なら着られるか——と御思案下された處なのである。けれども我々衆生が慳貪破戒の汗垢の泥凡夫であるが爲め、如何なる着物でも間に合はぬ。

### 三九 そこで

——これによりて一切の善惡の凡夫、ひとしくむまれ、ともにねがはしめむがために、たゞ阿彌陀の三字の名號をとなへんを、往生極樂の別因とせむと、五劫のあひたふかくこのことを思惟しをはりて——  
斯く有りとする者が残らず等しく着ることが出来るやうにと、南無阿彌陀佛の一法でと誓ひ下されたが選擇本願、南無阿彌陀佛なのである。故にそれは『斯く何れの行も及ばぬ者』を、唯南無阿彌陀佛の一行でとの廣大の信心」と、之を説かれたのが法然上人の御説法だつたのである。即ちそれが『歎異鈔』に來ては  
たゞ念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずる外に別の仔細なきなり。(第二章)

となつて來たのである。  
四〇 故に我々『だから念佛します、手織りを着ます』では、それは成る程眞似は出来る。法然上人の形を模するとは出来るも、それでは法然上人の言はれた選擇本願南無阿彌陀佛の行とはならぬ。法然上人の言はれたは、『斯く何れの行も及ばぬ者に、

この一枚を着せやうと、長々の親の骨折りて、斯くは與へて下された親の眞實の手織りぞ』と。故に孝養父母は措く、忍辱精進は措く、唯念佛して彌陀に助けられ參らすべし——故にそこになると、親の御與への手織りが眞實の行である。而して夫れを聞かざるゝと、その一念に『よき人の仰を蒙りて、信ずる外に別の仔細なきなり』——故に  
南無阿彌陀佛の行が他力。而してそれを頂いたのが信と、斯ういふことになるのである。

四一 而してその手織りの行を頂いたのである上は、『あゝ、然ういふ着物か、分つた』と、捨て、置く着物といふが有るべきで無い。『あゝ、さういふ御眞實でありしか』と、着物ならば着る、念佛ならば南無阿彌陀佛々々と稱へるに決つて居るのである。それは前席でいふ基督教に行かうと思つて居つた程の人が、一念その御眞實を知らざるゝと、思はず知らず南無阿彌陀佛々々と、もう念佛から離れられぬことになつて仕まつのである。そこを聖人は『信卷』に、『大經』に、聞其名號、信心歡喜とある、その聞其名號を釋して聞くと云ふは衆生、佛願の生起本末を聞いて疑心有

ること無し。是を聞くと曰ふ也。  
この佛願の生起本末——手織を織り上げて下さら無ければならなかつた親の親心、之を聞かねば信仰の徹するといふことが有る可きで無い。その御まことを聞くと有難やと、信心歡喜。おのづから念佛申さんと思ひ立つ心が起る。その頂いて稱える念佛は如來眞實の行と、斯ういふことになるのである。

### 一〇 眞實行の願、第十七願

四二 處て法然上人の選擇本願念佛を説かれたは、第十八の至心信樂の願で説いておいてになる。これを今は眞實行の願は第十七の諸佛稱名の願であると。——之れは何うかといふに、法然上人は眞實行の願は第十七願であるの、眞實行の願は第十八願であるのと、そんなごたふしたことは仰せられ無つた。法然上人は唯もう第十八願ばかり、ドシンと出しておいてになるのである。  
四三 處て有難いは、先より言ふ法然上人の眞似した

南無阿彌陀佛である。多くのお弟子方が我もくして、形ばかりは法然上人に似せるも、心が法然上人になつて居らぬ。そこで法然上人は、戒も形に於て持つておいてになる、一切經も讀んでおいてになる。それは四十二の時迄に六邊迄も一切經を御覽になつたといふ上人である。故に上人のは、斯くの如き戒行慧解ありてなされる南無阿彌陀佛と取つて行つたのである。イヤ熊谷直實や津の戸の三郎は、あれは無學故、南無阿彌陀佛々々と稱える一つと、方便に仰しやつたと迄なつて行つたのである。

四四 ところで聖人はそれに對して『イヤ何れの行も及ばぬ者を、この念佛一つとの本願で無いか。寧ろその者が南無阿彌陀佛のお恵み一つを頂く信心ばかりぞ』と。——それは他の人達は法然上人は「善く仕てお出でになる」に思つて居つたのである。處が聖人は『法然上人は愚癡無智の者の爲めの念佛と仰しやる、破戒無戒の者の爲めの念佛と仰しやる。その愚癡無智、破戒無戒とは、この愚禿親戀のことである。彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、偏に愚禿親戀一人が爲めなりけり』——茲が

聖人が念佛を『稱へねばならぬ』てお説きなさらなかつた。その稱へる念佛を御成就された御眞實を頂く眞實行の一つで仰しやるとなつて行つたものなのである。

四五 ところで今席『唯信鈔』を持ち出して私が一番言ひ度かつたは、この次きの所に、斯く南無阿彌陀佛の一つでと、五劫の間深くこのことを思惟し終りて

——まづ第十七に、諸佛にわが名字を稱揚せられんといふ願をおこしたまへり。この願ふかくこれをこころうべし。——

まづ第十八願に念佛の衆生を捨てぬと誓はれるその前に、斯く諸佛に我が名を稱揚せられんといふ十七願を起し給うた。

### 四六 その譯けは

——名號をもてあまねく衆生をみちびかむとおぼしめすゆへに、かつく名號をほめられむとちかひたまへるなり。——  
之を着るのぞ、頂くのぞと、之を十方諸佛の口より普く知らしめ、導かんと思召したが故に、第十七願に

設ひ我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば正覺は取らじ。との誓ひが起つたのである。若し

——しからずば佛の御こゝろに、名譽をねがふべからず。諸佛にほめられてなにの要かあらむ。——  
斯く何れの行も及ばぬ者に南無阿彌陀佛の親の手織りの名號ぞと、之を十方から齊しく知らしめんが爲に、この願を設け給ひたのである。と斯く言ひて、次に偈文を擧げ、

如來の尊號は甚だ分明なり。十方世界に普く流行せしむ。但稱名するものありて皆な往くことを得。觀音勢至自ら來り迎へたまふ。

斯くの如くこの願から現はれて、一切諸佛が南無阿彌陀佛々々と、十方世界にこの名號を稱揚し、讚歎し、流行せしめて下さる。即ち南無阿彌陀佛が現はれて來る眞實行の願はこの第十七願だと、茲が聖人の著しい處なのである。

### 一一 行信關係

四七 處て茲は法然上人は十八願て言はれたのを、聖人は十七願に言はれたと、然うとすると分ら無くなつてしまふのである。茲は極めて味ひの深い所。それは法然上人のお説き下されたは、何處迄も選擇本願の念佛を説て居て下さるのである。けれどもそれを聖人より頂きになる時は、——聖人は法然上人の眞似なされたので無い。故にその法然上人のお説き下さるは、その廣大本願の念佛を、普く知らしめ取次がなが爲に、第十七願より現はれて、諸佛が稱讚し、知らしめ、屈けて下さる出來事となるのである。そこになると大聖釋尊の出現も、三國の祖師の現はれて下されたも、乃至今斯く法然上人のお説き下さるのも、殘らず親戀にこの念佛を知らさうが爲め、第十七願の顯現であると、  
四八 その有難うとなるのも

法然のおほせそらごとならんや。

又『和讃』には

智慧光のちからより、本師源空あらはれて、  
淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ。

諸佛方便とさいたり、源空ひじりとしめしつゝ、  
無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける。  
實に斯く聖人におかれては、智慧の念佛を興へやうと  
智慧光の力より大勢至菩薩が現はれて、面の當り知ら  
せて下されたが、法然上人の御教化である。故にそれ  
聞けば親戀におきては『信ずる外に別の仔細なきなり』  
そこでその頂かれたのは則ち十八願の信となる。故に  
知らせて下さるが、十七の眞實行の願。頂いたのが、  
十八の眞實信の願となる。それは頂いたは親のまこと  
が着れたもの故、興へて下さるまことを頂けば、着れ  
たまこと迄が、親のまことと頂けたものである。故に  
それは第十八の至心信樂の願と、斯ういふことになる  
のである。

四九 こはこの行信關係は昔から分り難いとこになつ  
て居る。それは大抵が法然上人は稱へよとの仰せ故、  
稱へるといふ方になり易いのである。すると上人のは

四二  
それも私の力に非ず、佛がもと、廣大なる念佛往生  
の願を起して

彼の佛因中に弘誓を立てたまふ。名を聞いて我を念  
せんものは總て迎來せん。貧窮と將富貴とを簡はず、  
下智と高才とを簡はず、多聞と淨戒を持てるを簡  
はず、破戒と罪根の深きとを簡はず、但廻心して多  
く念佛せしむれば、能く瓦礫をして變して金と成さ  
しむ(唯信鈔)

これ程の廣大なる如來選擇の願心である。而してその  
廣大なる御心を、今面の當り十七願より現はれて、大聖  
釋尊の出世となり、將法然上人より直き、斯く手渡  
しされて見ると、即ち『親戀におきては唯念佛して彌  
陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて、  
信するほかに別の仔細なきなり』である。そこになる  
とも、  
よき人の仰せが直に如來招喚の勅命である。そこは『歎  
異鈔』次ぎのお言葉には、  
彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言  
なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の  
御釋虚言し給ふべからず、善導の御釋まことならば

眞に惠を喜ばれた念佛を言うて居られるのであるも、  
それ故稱へると稱へる方は、忽ち先さいふ行不退とな  
る。するとそれは方便の行信となる。それ故  
念佛は『之を着るだのぞ』とそれ迄言ふに及ばぬ。そこ  
の味ひが聖人が十七願に持つておいてになつた處なの  
である。而してその知らせて下さる行の眞實が、難有  
うと彌々心に頂かれたのが即ち眞實の信。そこで次ぎ  
には  
その念佛の行を正信する『正信念佛偈』を作つておい  
でになると、斯ういふ順序になるのである。こは今席  
はちと六かしいことを言ひ過ぎたやうであつた。

## 一一 報佛報土等

五〇 ところで  
『斯れ乃ち選擇本願の行信なり。』——即ち斯く興へて  
下さる着物も他力なれば、有難うと頂く心も他力であ  
る。然るに茲が此方より着るとなる時は、着た着物も  
形丈けは親の手織りに似て居るも、その實自分の思ひ  
つきであり、着た心も俺は着たとの自力である。する  
と方便の行信で、本物で無い。故にその者を手引して

眞實の行信に入らしめんとの方便の願がある。

五一

『其の機は則ち一切善惡大小凡愚なり。』

茲には惡凡夫の外に、

善凡夫も入れてある。けれどもそれは『善凡夫なら稱へられるから』とて無い。善人は自から善が出来ると思つて、『自分は金があるから親の手織りは着無くてよい。』『そう思つて居るのであるけれども、夫れは考へて見よ。外の着物と親が涙の塊りの手織りとは、着物の譯けが違ふぞ、今、陛下より一般に恩賜の下賜とある時は、自分は金があるから頂かなくてもをいふて居るは、大御心の悲けなさを知らぬからである。故に然らう言つて汝自身の心の恐ろしさを考へて見よと、斯く遣る瀬無く向はるゝ時は、如何な善人も今迄自分の小善を頼んで居つたを恐入つて、お慈悲に歸するとならるは、惡人のみならず、善人をもお見捨てなきお慈悲であるからである。』

五二

『往生は則ち難思議往生なり。』

難思議往生、雙樹林下往生、往生にも色々あるが、それ

四四

は品位、階次のある方便化土の往生である。今選擇本願はそういふ色形を超越したる難思議往生にして、必ずしも七寶樹林、八功德水が無いとは言はぬが、然らういふことよりも、然らういふことを飛びこえたる無上正眞道を超越するのである。そこは『正信偈』には蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身を證せしむ。煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の菌に入つて應化を示すと云へり。

五三

『佛土は則ち報佛報土なり。』

我々は動もすれば此世で想像さるゝ如き、形のある報佛報土と思ふのであるけれども、それは非常なる間違ひである。寧ろ然らういふ我々の考へて居る此の世、この身の當てにならぬを憐みて、その者をお見捨てなき大悲大願の汗、膏の塊として顯はれたお浄土のことが報佛報土といふこととなるのである。故に極樂といふとにしても、我々の彌々頂く可き處は何處にあるか。そういふ私をお見捨てなき御眞實の塊といふことゝひと所なのである。故に之を形で見やうとする

は非常な間違ひである。若し死にしまに眼に見える浄土なら、それは眞實報土で無ととなるのである。

五四

『斯れ乃ち誓願不可思議一實眞如海なり。大無量壽經の宗致、他力眞宗の正意なり。』

一實眞如海は佛の廣大なる證の境界である。即ちこの廣大なる眞實の行信は、一實眞如の絶對の境界から救ひの綱を御された誓願不思議の姿である。大無量壽經の宗致、他力眞宗の正意もこの眞實行信の外に無い。

### 一三 正信念佛偈を作つて曰く

五五

『是を以て知恩報徳の爲に宗師の釋を披くに——』

即ちこの廣大の御眞實を頂いて、知恩報徳の爲めに、天親菩薩が『淨土論』の初に

世尊我一心に、盡十方無碍光如來に歸命し、安樂國に生れんと願す。

と啓白の辭を述べられた。それを註釋せられた曇鸞大師の『論註』を披見するに、

『——言はく、夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し忠臣の君后に歸して、動靜己に非ず、出沒必ず由あるが如し。——』

如何なる不孝兒もひと度び親の前に頭が下り、又忠臣が君徳に悦服して、楠公が天皇の下に一身を投げ出された如く、菩薩の佛に歸せらるゝことも、その如くして動靜己に非ず、出沒必ず由あるが如くである。

『——恩を知つて徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし』苟も御恩を知つた上は、親子の間でも先づ朝は親に『お早う』夕に『お休み』は言は無ければならぬ。その如く佛に向ひても、何は措いても南無阿彌陀佛、歸命盡十方無碍光如來の啓白は仕なければならぬ。

『——又所願輕からず、若し如來威神を加えたまはずば將何を以てか達すとせん。神力を乞加す、所以に仰て告ぐ。——』

又こはこの頂いた廣大眞實を申述べやうとするのであるから、所願輕いこととて無い。こは人間の思惑の所願とは違ふのである。——故に佛の加威力を蒙るて無くしては、何うしてこのことが達せられやうか。——こは『信卷』の初めに、

四五



乃し如來の加威力に由るが故に。博く大悲廣惠の力に因るが故に。

とあると同じである。この故に如來の威神力を仰ぎつゝ、歸命盡十方無碍光如來と、告げられたのであるとある。今親鸞もその如く、喜び極り無き故に

『爾れば大聖の眞言に歸し、大祖の解釋をひかして、佛恩の深遠なることを信知して、正信念佛の偈を作て

曰く』

今それになぞらへて、自分の喜びを文字に表はし、書き遣し、啓白する『正信念佛偈』を書き作ると。斯くて先き程いふ『行卷』と『信卷』との間に、『正信偈』を出しておいてなるのである。それは先きにも言ふ『行卷』の念佛は親の手織りの着物である。その着物を頂いて信じたのが即ち『信卷』の信心である。即ち

この兩卷の間に、  
『唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり』の『正信念佛偈』を書いて、

歸命無量壽如來、南無不可思議光佛云云。

眞宗信者は朝に夕に之を佛前に拜誦するは、

をなすに至れり。本年孟蘭盆會の頃、其追悼の辭を徵せられしが、未だ其志を果さず、七月十六日傳道の途に上り、四國を経て九州に航し、七月二十七日別府に於て、予が三男常聰急病の電報に接し、晝夜兼行二十九日歸京し、妻と共に専心看護に従事したりしが、八月二十六日に至り、遂に寂を示すに至れり。是に於てや富路子嬢を失ひたまひし父母の心情は、即ち我等が亡兒を憶ふと同一にして、亦我等が兒を失ひて感ずる所の信仰上の披瀝は、そのまゝ、辻氏父母の信念たらざるべからざるに至れり。

前に録する維摩經の文は、病兒看護中に縊きて、切々子が胸に刻みたるものなりき。併子病を得て父母亦病みたりしが、遂に子の病癒えずして、父母の心亦永久に癒えざるなり。特に富路子嬢の如き看護の手を盡さるゝ日時もなくして長逝したまへり。母堂の心今に癒えざるも、洵に故ありと謂つべし。されど我等が子に對するの恩愛は、愛見の煩惱にして、彼の菩薩の衆

四六  
逆如上人は如何にも適切の道を遺して置いて下されたものである。而して之を今年に讀ませて頂くは、私として感謝極り無い次第である。(第八回夏季が道會第二日第二席)

## 辻富路子嬢追悼法話

近角 常觀

維摩經に曰く、譬へば長者に唯一子ありて、其子病を得れば、父母亦病む。若し子の病癒ゆれば、父母も亦癒ゆるが如し。菩薩も是の如し。諸の衆生に於て、之を愛すること子の若し。衆生病むときは、菩薩も病む。衆生病癒ゆれば菩薩も亦癒ゆ。又言く是疾は何の所因よりか起る、菩薩の疾は大悲を以て起ると。

昨年十一月十二日、辻氏の第四女富路子嬢、忽然寂をしされしより、一家の悲歎極りなく、特に母堂の落膽一方ならず、遂に其因縁によりて求道開法の念を起され、常盤法兄の紹介によりて、予は同一念佛の信交生に對する、無縁平等の大悲とは、異なることを顧みざるべからず。此の如くせば病を豫防し得たらん、此の如くせば病を本復し得たらん、曰く何、曰く何、種々無量の所感續々現じ來ると雖も、觀じ來れば畢竟是愚痴煩惱のみ。如何に後悔すると雖も、其當時に於て此の如くなし得ざるもの、是業報なり、因縁なり、約束なり。羊の毛兎の毛のささにある塵ばかりも、作る罪の宿業にあらずと云ふことなしとの聖訓、あるにあらずや。かくもなし得たらばと思ふはさることながら、其當時爲し得ざりし事實其ものが、因縁宿業にあらずや。たとひ一家を犠牲にして、父母全身を投すと雖も、愛兒が一瞬時の命を延ぶるあたはざるにあらずや。かくの如き業報に繫縛せられて、永久生死海中に流轉せる有様を觀そなはずもの、即大慈大悲の本願の御親心にあらずや。是維摩經に、痴に従ふて愛あるときは、我病生ずとある所以にして、我等が愛見の煩惱の爲に苦むことを悲憫まします、平等無縁の大悲こそ、實に菩薩衆

## 信仰書簡二一章

生の爲に病みたまふ所以なり。是に至りて我等は佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられし、大悲大願を仰ぎ奉りて、火宅無常の世界は、すべてのこと、みなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますと信ずるばかりなり。是に於てや翻て思ふ。我病を救はんと思ひし我子は、却て精神的に我を救はんが爲めの、大悲の示現にはあらざりしか。夢の世にあだにはかなき身を知れと、教へてかへる子は知識なり。我身を捨て、子を助けんと思ひしが、却て子は身を捨て、我を助けんと、雪山求法の童子にてありき。煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の菌に入りて應化を示せし、如來還相の普賢大士の徳なりき。嗚呼我等が愛兒は寂滅の雲にかくれて、永劫の黙不二を示し、愚痴の父母の爲に、戒雷を震ひ、法雨を樹ぎて、如來招喚の勅命を傳へたりき。我等は愛兒の知識に導かれて、共に安養樂邦の妙果を期せんかな。南無阿彌陀佛。(大正八年九月十二日誌)

先達て母の病氣をお知らせをして以來、だん／＼の御深切な、お心附ありがとう存じます。この不孝極る私を、世に何より大事な者と思つてくれた母は、遂に往つて仕まひました。母は臨終に際して、平生業成のありがたさを、最後の教訓としてのこしていつてくれました。それは言葉を以てではなく、行を以て説き、かせてくれたのであります。何しろ八十八の高齡で、この二三年來は、身心ともに弱つてゐたところに、先月十二日急に胃腸の加減で發病して以來、身體も自由にさかず意識も朦朧として、目醒めてゐる時ですら夢心地で、現實には適合しない、多くは吞氣なことばかり言ひますので、傍についてゐるものは、いゝ加減にバツを合して行くといつたやうな風で、看護しながらも、時々吹き出すやうなことがまゝありましたが、病勢は間もなく衰へましたけれど、衰弱の方が加つてまゐりまして、

遂にいけなくなつたのであります。丁度亡くなります前々日の事でありました。この日はいろ／＼の注文を出されるので、ついてゐるものも一寸手こづつたのでありましたが、この時私は御母さん、それはそうと一所に御念佛を申しましようと言つて、高聲に念佛をくり返しましたら、その心が通じましたか、母は急に手をさしのべて、その先を組合せ、一生懸命に瞑目して、高聲につゞけさまに御名を唱へられました。今から思へば、歎異鈔の、たゞ今さとりをひらかんずるごのちかづくにしたがひて、いよくみだをたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめとあるのは、實にこの時の有様であつたと、泌々思ひ合はされるのであります。それから間もなく落つきまして、昏々として深い睡におち、その翌日もすうつと同じ容態をつゞけました。そして其翌日の朝には、もう息づかひがらがつて來たのであります。つまり私と意識を交換した最後は、もろとも念佛をとへたことでありました。

誠にありがたいことでございます。たとへ病惱苦痛せめて、正念に住せずして終るとも、攝取不捨の願をたのみたてまつる身の心安さ、母は最後にこのことを切實に思ひ知らせてくれました。母の死とともに、四十八年うけ來つた護持養育の鴻恩を、いくらかちもひしらせて頂きました。己が身の恩知らずたることを自覺すること愈々深くして、生育我身大悲母の恩徳の廣大なることを、益々思ひ浮べすにはゐられません。同一に念佛して、生れ甲斐ある身として下さつたのは、全く母の手引によつたのでございます。その母に對して生前何一つ孝行らしいこともせず、誠に申譯もない私が、たゞ一つ今に心に快くかんじますことがあります。それはかつて御話をいたしたこともありませんが、歎異鈔を母と共によんだことで、私が念佛の申されるようになつて以來、歎異鈔を拜讀したことは、いくたびか知れませんが、少くともその半分は、母と共によんだのであります。それは私がいて歎異鈔をよもうと思ひました時

は、いつも大抵母をそばへよびまして、よんだものであります。母はこのことを大層よろこんでくれました。しかし打明けた處を申し上げますと、けふは一番御母さんのためによんで上げようと思つたことは、たゞの一度もありません。どうせ自分がよむのだから、序に母にきかせよう、別段邪魔にもならないからと、いつた位な氣持であつたのであります。要するに一から十まで勝手にやつて居つて、こちらからは、何一つ持出さないのに、そのことがたま／＼母の心をよろこばせ、満足させることが出来たとは、何んとありがたいお計ひではありませんか。これにつけても私は、この頃あの非行非善と云ふことを、しみ／＼と味はせて頂いてゐたのであります。母は辱くも御法主より、聞信院釋尼妙聲と云ふ、法名をいたゞきました。聞信とは實にありがたい名で、私はその文字を見て、眞に母其人を思ひ浮べることが出来ます。さり乍ら母といひ、妻獲信院蓮香と云ひ、同一身に別れまして、凡情の淋しさを秋

の夕に感ずると同時に、後れて人にみちびかれ、さきだたば人を導かんと云ふ御文も、つく／＼と味はして頂くのであります。池山 榮 吉

大正八年十一月十八日

近 角 老 兄

座 下

五城風露轉寂寥  
顧仰大悲矜哀光  
照破迷情愚痴闇  
今は大經の獨生獨死獨去獨來の御言葉、切實に感ぜられ候まゝに、  
親子相愛須臾間  
獨生獨死是人生  
若微本願慈悲淚  
我永劫向三途歎  
先生の御手紙を拜誦仕り候て、夢の世にの古歌身にしみ／＼と味はれ候まゝに、  
假爲吾子現此土  
開示生死夢幻相  
薩埵還相廻向德  
入我悲懷斷煩惱  
まほろしの世ぞと教しへて御佛の  
國にかへりぬ、あはれ我子は

拜呈 先般長女和子死去いたし候ひし折には、早速御懇到なる御吊電を賜はり、その後御心こめられての御手紙を頂き、且つ御香典をさへ頂戴いたし、忝く御禮申上候。かねて人生夢幻の相を御教化にあづかり、如來大悲の御眞實を肝銘仕り居り候ひし身も、痛切なる親子死別の現實に遭遇いたし申候ては、戀々の悲涙綿々の追懐とゞめがたく、歎異鈔の九節、今更に我身の上とおもはれ候につけても  
恩愛難斷涙潜々  
子を思ふ心のやみの底までも  
てらす佛の道ぞうれしき  
たゞ念佛の一道のみありがたく御座候。本月六日は五日に相あたり申候故、心ばかりの品御送り申上候。御うけとり遊ばされ度候。先は御禮のみ申上たく、一筆かくの如くに御座候。謹言  
福島 政 雄  
近 角 先 生  
尊 前

◎御 正 忌

秋老ひ、天寒ふして亦御正忌の季節とはなりぬ。寺々に聲高ふして、遙に響く勤行は、聖人が胸底より溢れ出てたる正信偈和讃なるを想へば、何を聖人の遺徳夫れ廣大なる。

如來大悲の恩徳は

身を粉にしても報すべし

師主知識の恩徳も  
ほねをくだきても謝すべし

居多が濱の畔に低徊したまひ、鳥屋野に庵を結びたまへる聖人流罪の光景、宛として眼前に髣髴たり。まことには是れ面の當り五劫思惟を實現せしめ、永劫修行を縮寫したまふ。聖人の常の御述懐、歴々として吾人の耳に響き来る。親鸞一人が爲なりけりの一言は、實に十方衆生の爲なりけり。嗚呼何等の幸か此の如き德音に接するを得たる。豈遠く宿縁を慶ばざるべけんや。

### ◎御往生

求道得信には「吉水入室」を感じ、家庭生活には「六角靈告」を想ひ、行路艱難には「北越流罪」を想ひ、傳道讃歎には「稻田草庵」を慕ふ。人皆其境遇と年齢とに従ひて、坐ろに聖人の御跡を追ひたてまつるを得べし。吾人は「箱根の晩陰」「蹄洛移住」とを追想したてまつる毎に、聖人が諄々として倦みたまはず、老の至るを忘れて、嶮岨を越へ、東西に流離して唯々末代の我等を哀憐攝受したまひて、如來二種の廻向を十方にひとしく弘めんとの矜哀の御心、感泣したてまつるに餘あり。而して『聖人弘長二歳壬戌仲冬下旬の頃より、聊か不例の氣在す。夫より以來口に世事を交へず。唯佛恩の深きことを述べ。聲に餘言をあらはさず、専ら稱名絶ゆることなし。而して第八日午時頭北面西右脇に伏したまひて、遂に念佛の息絶えまし〜終んぬ。千時類齡九旬に満ちたまふ』嗚呼是れ我等遺弟慟哭して、追慕措くあたはざる所、されど聖人は明かに極樂の蓮臺にて、一味の衆中を待ち受けたまふ。嗚呼慕はしき哉、聖人の御跡、嗚呼樂しき哉、西方寂靜無爲の淨土。(已上三項求道舊巻中ヨリ再録)

### 雜誌値上廣告

本誌は昨年再發行後、従前來の定價を支持して來ました。が、今年初來の社會事情の變遷に伴ふ印刷製本工賃の大暴騰に立至つて、本誌の如き特殊雜誌は殊に經營困難の事情に立ち至つて、まことに申すに、今日頃前號より次記の如く定價に改正を加へ、今後は努めて發行を完ふさせて頂くことに致しました。何卒右事情御諒承下され、猶ほ本誌の事業を御助勢下され度く御願致します。

一部 郵税共廿五錢  
半年分(六冊)同壹圓參拾五錢  
一年分(拾貳冊)同貳圓五拾錢  
猶ほ勝手ながら従來前金御預り致し居り候分に對しては前號以下は右改正定價に換算の上送らせて頂いて居りますから合せて御諒承を願上ます。

### 求道發行所

近角常觀著

## 信仰問題

定價七十五錢  
郵税六錢

## 懺悔錄

十一版

定價卅錢 郵税貳錢

本書には著者が人生の暗黒にぶつかつて苦しみましたこと、それから、それが大悲の眞實に救はれ、方向一轉の信仰生活に出させられた實驗から、それが王金誠悲劇、阿闍世王の煩悶得脱にあらはれて、發らず本書に盡くしてあります。著者が告白書として、著書の信仰を理解する、には最も好適であります。

## 人生と信仰

七版

定價四十五錢 郵税四錢

目次  
第一章 人生問題と信仰  
第二章 悲觀思想と信仰  
第三章 倫理行と信仰  
第四章 犯罪心理と信仰  
第五章 社會問題と信仰  
第六章 國家秩序と信仰  
第七章 世界宇宙と信仰  
目次示すが如き内容で、人生、信仰を外にして解決の道ある可らざること、その信仰が實人生に及ぼし來る力の偉大なること、それらな理解して下さるには本書を一讀願します。

右二書昨年來久しく品切てしたが、今回出來致しました。

東京市本郷區森川町一番地  
振替東京一六六九六番

### 求道發行所

近角常觀著

# 慈光錄

求道叢書  
第一編

定價八十五錢 郵稅四錢

●本書は「求道」第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を選びて収録刊行す  
●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の内の風光を告白描寫せるものに於て著者が筆になるものとせば、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注せる文字なり  
●猶ほ加賀國專光寺所藏親鸞聖人眞筆聖德太子二十句偈文を原本大コロタイプ版に附して巻頭に添付したり

## 集金郵便

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り何書にても御便利集金郵便の御註文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料金を加えたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一  
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

求道前號要目 (十月發行)

信仰の徹底及び人生と彼岸との交渉  
寂靜と應現……………近角常觀  
選擇本願の行信―「正信偈」講話…近角常觀  
池山氏獨譯「歎異鈔」序文

●本誌は毎月一回二十日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこと●送金は成るべく振替にあられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部廿五錢 六ヶ月分 壹圓卅五錢 (郵稅不要)  
十二ヶ月分 貳圓五十錢  
大正八年十一月廿四日印刷  
大正八年十一月廿七日發行

發行所

東京市本郷區森川町一番地  
編輯人 近角常觀  
印刷人 白土幸力

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)